

<論文>

長さか？ 張りか？ を越えて
—ドイツ語主母音の非強勢位置における音節的振舞いに着目して—
Beyond length and tension
— An observation of German main vowels from a perspective
of their syllabic behaviors in unstressed positions —

藤縄 康弘
Yasuhiro Fujinawa

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：現代のドイツ語において主母音の長さの差異にはたいてい張りの差異が付随する（[i:] *Miete* 「家賃」— [ɪ] *Mitte* 「中央」, [u:] *Buße* 「改悛」— [ʊ] *Busse* 「バス」 *pl.*, ...）。この2つの次元のうちどちらがドイツ語の音韻論にとってより本質的であるかは、絶えず議論されて来たものの、いまだ見解が割れている。この間、1. 「長・短から緊張・弛緩が生じる」（Trubetzkoy 1939, Noack ²2016 など）と、2. 「緊張・弛緩から長・短が生じる」（Vennemann 1991, Eisenberg ⁴2006 など）という正反対の立場が対峙しているが、いずれの立場にも理論的ないし経験的な弱点があり、差異の一方の次元を他方の次元に全面的に還元する試みは成功していない。こうした中、本稿は、これまでどちらの立場からも看過されて来た、当該母音の非強勢位置における音節的な振舞いを根拠に、少なくとも標準的な変種において長さとは一方が他方に還元される関係ではなく、開口度に応じて双方が弁別の特徴として機能するかたちで共存していることを主張する。

Abstract: In modern German, the difference between long and short vowels is usually accompanied by the distinction between tense and lax vowels (e.g., [i:] in *Miete* “rent” versus [ɪ] in *Mitte* “middle”; [u:] in *Buße* “penance” versus [ʊ] in *Busse* “bus” *pl.*; ...). Although it has long been debated which of these two dimensions – length or tension – is more fundamental to German phonology, opinions remain divided into two opposing sides. The first is the length results in tension (e.g., Trubetzkoy 1939 and Noack ²2016), and the second is the tension results in length (e.g., Vennemann 1991 and Eisenberg ⁴2006). Neither of these positions has entirely succeeded in reducing one dimension of difference to the other, as both have their own theoretical and/or empirical weaknesses. Against this background, the present article argues that, at least in standard varieties of German, length and tension are not related in such a way that one can be reduced to the other. Instead, they coexist as distinctive features depending on vowel openness. The main argument supporting this view is the syllabic behavior of the main vowels in unstressed positions, which has so far been overlooked by both sides.

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002001024>

キーワード：現代ドイツ語、母音体系、強勢、音節の切れ方、ウムラウト

Keywords: modern German, vowel system, stress, syllable cut, umlaut

1. はじめに

現代ドイツ語では、(1) のように母音の長・短がたいてい張りの差異を伴う。(2) のように開口度の



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

高い母音ではこの差異を（一見）伴わない対も、標準的な変種で確かに認められるが、これが緊張・弛緩によらない純粋に長・短の対であるのかどうかは、変種の問題もあって、にわかには断じ難い。以下では、変種の問題には本格的に立入らず、対象を標準的な変種に絞り、長さや張りの関係を考察する。

- (1) a. [i:] — [ɪ]: Miete ['mi:ɪ.tə] 「家賃」 — Mitte ['mɪtə] 「中央」
 b. [u:] — [ʊ]: Buße ['bʊ:sə] 「改悛」 — Busse ['bʊsə] 「バス」 (pl.)
 c. [y:] — [ʏ]: hüte ['hy:ɪ.tə] 「番をする」 (1.sg.prs.) — Hütte ['hytə] 「小屋」
 d. [e:] — [ɛ]: beten ['bɛ:tɪn] 「祈る」 — Betten ['bɛtɪn] 「ベッド」 (pl.)¹
 e. [o:] — [ɔ]: Koma ['kɔ:ma] 「昏睡状態」 — Komma ['kɔma] 「コンマ」
 f. [ø:] — [œ]: Höhle ['hø:lə] 「洞窟」 — Hölle ['hœlə] 「地獄」
 (2) a. [ɛ:] — [ɛ]: Täler ['tɛ:lə] 「谷」 (pl.) — Teller ['tɛlɐ] 「皿」
 b. [a:] — [a]: rate ['ra:tə] 「助言する」 (1.sg.prs.) — Ratte ['ratə] 「ねずみ」²

母音の長さや張りのどちらがより本質的な差異であるかという問いは、ドイツ語の音韻論で議論されるようになって久しいのだが、いまだ決着を見ていない。こうした中、本稿は従来の代表的な見解への対案として、これまで一般的に看過されて来た非強勢位置における当該母音の音節的振舞い — すなわち、強勢を受けない場合でも開音節・閉音節のいずれにも出現するか、いずれか一方にしか出現しないか — を根拠に、少なくとも標準的な変種において長・短と張り・緩みは一方が他方に還元される関係にはなく、開口度に応じて双方が弁別の特徴として機能するかたちで積極的に共存していることを主張する。

本稿の構成は次のとおりである。2. 節では、先行研究の主潮流において、当該差異の一方の次元を他方の次元に還元しようとする関心が追究されているものの、長・短と張り・緩みのどちらがより本質的であるかをめぐって、2 種類の対照的な立場が対峙している状況を概観する。その際、いずれの立場も、とりわけ (2) をめぐって理論的・経験的な弱点を孕んでいるが、そうした不首尾の背景として、これまでの研究が事実上、強勢位置における母音の振舞いしか観察していなかったことを指摘する。この方法的偏りを正すべく 3. 節では、非強勢位置における母音の長さや張りの関係を、標準的な変種を対象に整理する課題に取り組む。現象を便宜上、(i) 強勢位置で長く、開音節をなし得る緊張母音 ([i:], [y:], [u:], [e:], [ø:], [o:]), (ii) 強勢位置で短く、閉音節しかなさない弛緩母音 ([ɪ], [ʏ], [ʊ], [œ], [ɔ]), (iii) 強勢位置で長くも短くもなり得、長いときには開音節をなし得る弛緩母音 ([ɛ:] – [ɛ], [a:] – [a]) の 3 つに分けて観察する。その結果を受けた 4. 節では、長さや張りの一方を他方に還元しようとする従来の一元論に代わって、双方の次元が一定の条件下で棲み分けながら共存する二元論的な音韻体系を提案し、5. 節で締め括る。

本論に入る前に用語法について付言すると、分析の対象となるドイツ語の母音は、縮約され決して強勢を受けないシュワー [ə] と [ɐ] を除く単母音であるが、これを本稿では「主母音」と称する。また、「強勢」は、ドイツ語の場合、単成語に原則としてひとつしか存在せず、副強勢の現れる環境がほぼ複合語に限定される³ ため、複合語が潜在的に関わらない限り主強勢を指して用いることにする。

¹ (1d-f) における [e] – [ɛ], [o] – [ɔ], [ø] – [œ] は、一般的な音声学においては開口度の差異を示す音声記号だが、ドイツ語の音声学・音韻論では伝統的に緊張・弛緩を示す目的で用いられている。

² (1) と (2) すべての例の音声表示中にあるピリオド (.) は音節境界を示す。この記号が各対の右側の項目において音と音のあいだではなく子音の下に打たれている事情は、のちほど 2.1 節で解説する。

³ ただし、単成語の中の一部の派生語と複合語との境界は後述 (3. 節) のようにしばしば連続的である。

表1 先行研究のアプローチ・タイプ

解決のレベル 本質的な差異	A. 分節 (=音素) レベル	B. 超分節 (=音節等) レベル
1. 長・短	?	Trubetzkoy (⁷ 1989 [1939]), Becker (1998), Noak (² 2016), ...
2. 緊張・弛緩	Grewendorf, Hamm, and Sternefeld (² 1988), Eisenberg (⁴ 2006), ...	Sievers (1876), Vennemann (1991), Maas (² 2006), ...

2. 先行研究の特色と問題点

ドイツ語の母音の長さと張りをめぐり、この間、1.「長・短から緊張・弛緩が生じる」と、2.「緊張・弛緩から長・短が生じる」という2つの対極的な立場が提示されている。1. にせよ 2. にせよ、アプローチのタイプとして、本質的な差異を A. 母音そのものに内在する分節的特徴として理論化することも、B. 音連鎖に被さる超分節的特徴として理論化することも可能である。A では、長・短ないし緊張・弛緩のどちらか一方の対立が音素レベルで想定される一方、B の場合、一方の差異の他方への還元は音節等のレベルで担保されることになる⁴。先行研究で現に採用されているアプローチをまとめると、表1のようになる。表1で特筆すべきは、タイプ1Aの研究が見当たらないことである。管見の限り先行研究では一貫して、長・短がドイツ語の母音に内在する特徴とは見なされていないのである。

2.1 長・短を本質的な差異と見る立場とその問題点

いま指摘した全般的な研究潮流を決定づけたと考えられるのが Trubetzkoy (⁷1989 [1939]: 169–179) である。彼は、母音の量的性質がモーラに依存するラテン語やフィンランド語、日本語のような「モーラ型言語」と、音節に依存するドイツ語やオランダ語、英語のような「音節型言語」とを対比し、後者における母音の「長さ」に以下の説明を与えている：

これらの言語において強度は、自由 [=長さに左右されない] で呼氣的な（「強弱の」）アクセントによって実現される。量的な対立は、開いた語末の環境で中和されるのだが、この開音節かつ強勢のある語末音節に現れてよいのは**長い母音音素のみ**である。ゆえにこのケースでは、短い音節主要部ではなく長い音節主要部のほうを、無標の相関項と認定せざるを得ない。つまりここでは、片や普通の、完全に発声し尽くされる母音音素と、片や後続の子音によって声が途中で堰き止められ、切断されてしまう母音音素とが対立しているのであり、後者の「きつい切れ方」こそ相関性特徴 [=その有無ゆえに欠如的対立が成立する特徴] なのである。かくのごとき「**音節の切れ方に支えられた相関性**」の下、長さとは、後続子音に妨げられずに声が完全に出切るかどうかの謂いにほかならないのである。

(Trubetzkoy ⁷1989 [1939]: 176 ; 拙訳。強調と鍵カッコは原著者⁵, [] の補足は引用者による)

⁴ その結果として、B では母音の音素インヴェントリーの量が A のおよそ半分になる。

⁵ 原文は次のとおり：Die Intensität wird hier durch den freien expiratorischen („dynamischen“) Akzent realisiert. Der Quantitätsgegensatz ist im offenen Auslaut aufgehoben. Dabei dürfen in den offenen betonen Auslautsilben **nur lange** Vokalphoneme stehen. Daher müssen hier nicht die kurzen, sondern die langen Silbenträger als merkmallöse Korrelationsglieder betrachtet werden. Es kann sich hier also nur um den Gegensatz zwischen den normalen, voll ablaufenden Vokalphonemen einerseits und andererseits den in ihrem Ablauf durch Einsatz des folgenden Konsonanten unterbrochenen, abgeschnittenen Vokalphonemen handeln – wobei der „scharfe Silbenschnitt“ das Korrelationsmerkmal ist. Bei dieser „**Silbenschnittkorrelation**“ ist die Länge nur der Ausdruck des vollen, ungehemmten Vokalablaufes durch den folgenden Konsonanten.

ここで長さは、母音そのものが備えている内在的性質というよりは、母音の発声を遮る子音が介入するか・しないか、という音節の構造的差異の発現と受け止められている。Trubetzkoy (1989 [1939]) は、子音が介入しない構造のほうを無標、介入する構造のほうを有標とし、前者で長母音が、後者で短母音が実現するとしている。長・短と有標・無標とのこうした対応関係は、モーラ型言語のそれ（短母音が無標、長母音が有標）と正反対であるが、このような扱いをする根拠として Trubetzkoy (1989 [1939]) が挙げているのは、ドイツ語などの音節型言語の場合、母音の長・短の対立が語末の強勢を有する開音節において、短母音ではなく長母音へと中和される事実である。もっとも、Trubetzkoy (1989 [1939]) 自身は、当該箇所ですべてこれを例証する具体例を示していない。そこで、(3)–(4) にドイツ語からいくつか例を補足しておく。件の環境に現れる母音はいずれも長いものである。

- (3) Vieh ['fi:] 「家畜」、früh ['fry:] 「早い」、Kuh ['ku:] 「雌牛」、Schnee ['fne:] 「雪」、Bö ['bø:] 「突風」、
Stroh ['ftro:] 「麦わら」
(4) zäh ['tsɛ:] 「ねっとりした」、ja ['ja:] 「はい」

このように、Trubetzkoy (1989 [1939]) が上掲箇所指摘した「音節の切れ方」の差異は、第一義的に母音の長さとして体现される現象である。加えてこれは、副産物として母音の張りをも説明し得る。すなわち、発声を最後まで許すことで母音の長さを可能にする無標の音節構造が、完全な調音を通じて緊張母音を生み出し得る一方、声を途中で遮ることで長さを犠牲にする有標の構造は、張りに関しては不完全な調音、つまり弛緩母音しかもたらないと予想される。そして、この予想は現に (1) や (3) によって支持される。これらの事例において長母音は緊張母音、短母音は弛緩母音である。

他方 (2) や (4) には、予想どおりでない長い弛緩母音 ([ɛ:] や [a:]) が見られる。しかし、これらの事例は予想を覆す反例とまでは言えない。というのも、上掲箇所では明言されているとおり、当該の対立では長い母音が無標である。そのような母音には、有標の対立項が常に短いことを担保する「きつい切れ方 (scharf geschnitten [独] = abrupt cut [英])」⁶ という特徴こそ一切関与しないが、欠如的対立の一般的な定義 (Trubetzkoy 1989 [1939]: 67) に鑑みれば、この弁別的特徴の付随現象に過ぎない弛緩の可能性まで拒絶されるわけではない。ここに長い弛緩母音が生まれる余地が残されているのである。

予想への反例となり得るのは、開音節に現れる短い母音である。とはいえ、そのような母音は、少なくともドイツ語では (限られた逸脱的ケース⁷ を除き) 強勢位置には認められない。認められるのは (5) が示すとおり、非強勢位置に限られる。

⁶ 「きつい」ないし abrupt という訳は本稿筆者による。原語 (ドイツ語) の scharf は、一般的に「鋭い」ないし “sharp” と訳される形容詞だが、ほかにも「(味が) 辛い」、「(批判などが) 辛辣な」といった比喩的意義を有しており、Trubetzkoy (1989 [1939]) の意図はこの感覚のほうに近いと考えられる。というのも、本節でこのあと詳しく述べるとおり、当該の短母音 (弛緩母音) と後続母音とのあいだに子音が1つしか存在しない (1) や (2) の場合、2つの音節は画然とは切り離されないからである。これを「鋭い切れ方」ないし sharp cut と訳しては、むしろ逆の意味に取られかねない。ちなみに、既存の邦訳書 (本稿末の文献表を参照) でこの箇所は「鋭い音節切り」(189 頁) という直訳調である一方、英訳書では — おそらくいま述べた理由から — 直訳の代わりに原著者自身による “der scharfe Silbenschnitt” の言い換えである “fester Anschluß” 「緊密な接続」を訳出した “Close contact” (p.178) が充てられている。

⁷ 逸脱の重要例として、Agens ['a.gens] 「動作主」のようなラテン語由来の専門用語が古典ラテン語を模して発音される事例や、Mama ['ma.ma], Papa ['pa.pa] のように言語習得の最初期段階で習得される語彙の原初的な発音に残る事例が挙げられる。こうした事例では逸脱的でない発音の可能性も存在し、一般的にはそちらのほうが実践されている ([a:.gens], [ma:.ma:], [pa:.pa:]; Mangold 1990: 122, 485, 562)。

- (5) *vielleicht* [fɪ.'laɪçt] 「ひょっとしたら」, *Physik* [fʏ.'zi:k] 「物理学」, *Musik* [mu.'zi:k] 「音楽」, *Element* [e.lɛ.'mɛnt] 「要素」, *lebendig* [lɛ.'bɛn.dɪç] 「生き生きした」, *Ökonomie* [ø.ko.no.'mi:] 「経済(学)」, *komatös* [ko.ma.'tø:s] 「昏睡状態の」, ...

Trubetzkoy (1989 [1939]) にしてみれば、母音の長・短とアクセントとの質的相互関係（モーラの長・短がピッチ・アクセントと、音節的な長・短が強勢アクセントと親和的であること）を言語横断的に論じることがねらいだっただけに、非強勢位置の現象は関心の埒外だっただろう。

このように、Trubetzkoy (1989 [1939]) は発想として十分に適格なものであると言える。すると、母音の長さを当該音節内への後続子音の介入の有無として捉える彼の発想を理論的にどう再現するかが次なる課題となる。

この方向でもっとも首尾一貫していると思われるのは Becker (1998) である。Becker (1998) は、強勢を受ける音節を対象に、基本的に母音から構成される要素である「核」(Nukleus [独] = nucleus [英]) をさらに「内膨」(Implosion [独] = implosion [英]) という要素で補完し、この核と内膨の統合を、音節の最小構成という意味で「芯音節」(Kernsilbe [独] = core syllable [英]) と呼んでいる。本稿では以下、単に「芯」と称する。芯に充填される母音は、核と内膨の両方を占めれば長くなり、核しか占めなければ短くなるが、後者の場合でも内膨を空のままにしておくことは許されないため、子音でこの位置を埋めざるを得ない。こうして、母音の短さは後続の子音によって本来の長さが切り詰められる結果である、という短母音に固有の事情が明確にされる上、当該母音が語末の強勢を有する開音節に分布しないことも適確に説明される。単音節の語形である（ゆえにその唯一かつ語末に位置する音節は強勢を受ける）*Bett* ['bɛt] 「ベッド」(sg.) と *Beet* ['be:t] 「畝」で図示すれば図1のようになる。

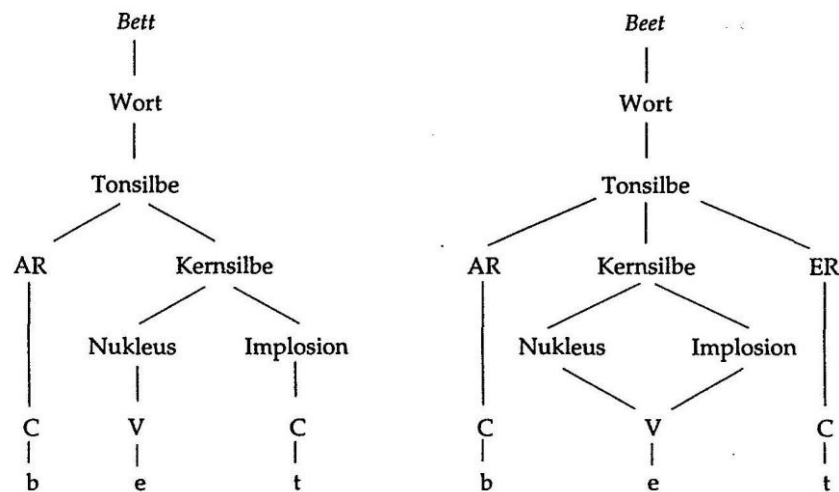


図1 ドイツ語における母音の長・短 (Becker 1998: 165)⁸

ちなみに、(1) や (2) のような2音節から成る語形の第1音節といった、強勢を受けるものの語末ではない音節において、後続の母音とのあいだに存在する子音がただ1つだけのときは、この子音が後続音節のオンセットに位置することは確かなので (Noak 2016: 58)、当該音節の短母音は、短いにもかか

⁸ 樹形図接点に掲げられている標識のうち、英語ベースでないものの意味は次のとおり：Wort「語」、Tonsilbe「強勢音節」、AR<Anfangsrand「オンセット」、Kernsilbe「芯」、Nukleus「核」、Implosion「内膨」、ER<Endrand「コーダ」。

わらず開音節をなしているように思われなくもない ((1) 各対 2 番目の事例 *Mitte* ['mɪtə], *Busse* ['bʊsə], *Teller* ['tɛlɐ] などを参照). それでもドイツ語の音声学・音韻論は伝統的に, この短母音 (を核とする音節) も直後の子音によって介入を受けていると解釈している. その意識のひとつの現れとして, 当該の語で音節境界を示すためにピリオドを打つのであれば, 2 母音間に 1 つしか存在しない子音の前後ではなく真下 (または真上) に打つのが慣例である. こうした子音は前後両方の音節に帰属する両接的 (ambisilbisch [独] = ambisyllabic [英]) な子音であり, しばしば「関節 (Gelenk [独])」にも喩えられる (Eisenberg 2006: 126) のだが⁹, Trubetzkoy (1989 [1939]: 176) の言う音節の「きつい切れ方」を説明する道具立てにもなり得る. そこで Becker (1998) は, (1e) と同じ例を用い, 短母音での「きつい切れ方」を長母音での「穏やかな切れ方 (sanft geschnitten [独] = smooth cut [英])」との対比で図 2 のように図解している. 「穏やかな切れ方」の *Koma* ['ko:ma] と違って「きつい切れ方」をする *Komma* ['kɔma] では, 母音間に唯一存在する子音 m が第 2 音節のオンセットだけでなく, 第 1 音節の内膨にも帰属する格好になっている. これは, 内膨が芯の必須要素として空のままであってはならないという要請からの帰結として, 理論的にも経験的にも, 恣意的ではなく首尾一貫した捉え方と言える.

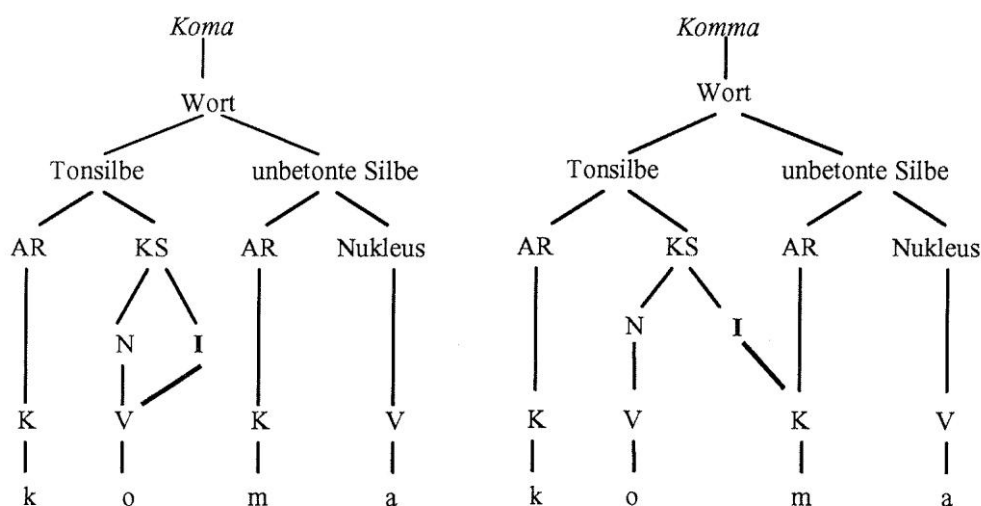


図 2 「穏やかな切れ方」の *Koma* と「きつい切れ方」の *Komma* (Becker 1998: 165)¹⁰

とはいえ, Trubetzkoy (1989 [1939]) の発想を忠実に理論化している Becker (1998) だけに, そもそも Trubetzkoy (1989 [1939]) が関心を寄せていなかった事例 — 強勢を受けない母音 — を扱おうとすると, その弱みが顕在化する. Becker (1998: 165) は — 図 2 の 2 つの例における第 2 音節 -ma ですでに実践しているとおり — 非強勢の音節に対しては複合的な芯構造ではなく, 内膨を伴わない単体の核構造が適用されると主張している. これは理論上, 母音の長・短を母音自体の内在的特徴ではなく音節構造の現れと見る立場を一貫するために必要な措置と認められる. しかし, 経験的には難があると言わざるを得ない.

すでに (5) で確認したとおり, 強勢位置で長く実現される母音も, 強勢を受けなければ短く実現され

⁹ ただし, 両接的な子音によって介入を受ける第 1 音節が開音節か, 閉音節かについては, 見解の相違がある. 本稿では, たとえ両接的なものであっても子音によって閉じられる点を重視し, こうした音節も閉音節と見なす.

¹⁰ 図 1 になく図 2 で加わった標識の意味は次のとおり: unbetonte Silbe 「非強勢音節」, KS < Kernsilbe 「芯」, N < Nukleus 「核」, I < Implosion 「内膨」. なお, 母音と子音の表示は図 1 では英語ベースの V と C だったが, 同頁のこちらの図ではドイツ語ベースの V (< Vokal) と K (< Konsonant) に変わっている.

るが、強勢を受けない母音は、何もこうした緊張母音に尽きるわけではない。弛緩母音も、(6) のとおり相変わらず短い母音として非強勢位置に現れ得る。しかもその振舞いは、強勢位置に現れる場合と共通する。すなわち、(強勢位置でも長母音と最小対をなし得た [ɛ] と [a] を除く) 弛緩母音が、(6a) のとおり、非強勢の条件下においても閉音節にしか現れないのに対し、[ɛ] と [a] は (6b) のような閉音節にも、(6c) のような開音節にも、どちらにも現れ得る。さらに、緊張母音と弛緩母音が非強勢位置でも短いまま最小対をなす事例も (件数こそ極めて少ないものの)、(7) のとおり存在する。

- (6) a. *imposant* [ɪm.po.'zant] 「感銘を与える」、*sympathisch* [zʏm.'pa:.tɪʃ] 「好感が持てる」、*punktuell* [pʊŋk.'tʃuəl] 「点的な」、*Nörgelei* [nœr.gə.'lai] 「文句、小言」、*Kostüm* [kɔs.'ty:m] 「衣装」、*illegal* [ɪle.'ga:l] 「不法な」、*Supplement* [zʊple.'ment] 「補遺」、*Kommunist* [kɔmu.'nɪst] 「共産主義者」、…
 b. *Bettina* [bɛ.'ti:.na] 「ベッティーナ (女性の名)」、*Antenne* [an.'tɛnə] 「アンテナ」、…
 c. *trainieren* [trɛ.'ni:.rən] 「トレーニングする」、*Atom* [a.'to:m] 「原子」、…
 (7) *Taxis* ['tak.sɪs] 「タクシー」 (*pl.*) — *Taxis* ['tak.sɪs] 「走性」

これら一連のデータが示すのは、Becker (1998) の芯 (=核+内膨) 構造を採用する限り、それは強勢音節だけでなく非強勢音節にも (おそらくシュワーから成る音節は例外として) 適用されるべきだということである。しかし、このような修正を採用すれば、提案された音節構造自体は、一定の根拠¹¹ によって引き続き正当化されるかもしれないが、母音の長短を説明する発想の根本が破綻してしまう。というのも、(5) *komatös* [kɔ.ma.'tø:s] や (6a) *Kostüm* [kɔs.'ty:m] の第 1 母音のように強勢を伴わない母音は、内膨を占める子音を伴うか否かに関わらず一様に短いからである。実際のところ母音の長・短は、開音節が可能かどうかという音節的条件に、強勢の有無という条件が相俟って定まるのである。この場合、音節的条件を「核+内膨」の構造として理論化することは、もはや要請ではない。後述するとおり、開音節を許すかどうかを内在的または副次的な特徴として母音に帰すことで、音節構造については、必須の核+任意のオンセットやコードとから成るとする通常の枠組みを変えなくても、同等かそれ以上の用が足せる。加えて、ドイツ語をはじめとする個別の言語 (類型) に特化しないそのような枠組みのほうが、通言語的適用可能性に鑑みて好ましいとも言えるだろう。

2.2 緊張・弛緩を本質的な差異と見る立場とその問題点

いま言及した開音節の可否を母音に帰すという発想は、母音の緊張・弛緩を本質的な差異と見る立場で広く受け入れられている。この立場では、表 1 で示したとおり、緊張・弛緩を母音に内在する特徴とするタイプ 2A のアプローチも、超分節的レベルの別の要因の発現と考えるタイプ 2B のアプローチも、どちらも現に実践されている。以下では、両者の概要を順に見ていく。

2.2.1 タイプ 2A

このタイプの研究成果でもっとも徹底しているのは Eisenberg (⁴2006: 88ff.) であろう。彼は標準ドイツ語の主母音音素を表 2 (次頁) のように体系化している。そこで「狭」、 「半狭」とされている母音は (1) に挙げた母音をカバーするが、基礎母音 (cardinal vowels) に照らすなら通常は半広とされる [ɛ], [œ],

¹¹ 例えば、(1e) *Koma* ['kɔ:.ma] や (5) *komatös* [kɔ.ma.'tø:s] の第 1 母音は核に加えて内膨も占めるゆえに開音節をなし、この点で (1e) *Komma* ['kɔma] や (6a) *Kostüm* [kɔs.'ty:m] の第 1 母音のように内膨を後続子音に奪われるものと対照的である、といった根拠が考えられる。

表 2 Eisenberg (42006: 91) による標準ドイツ語の主母音音素の体系

前舌				後舌		
緊張		弛緩		弛緩	緊張	
非円唇	円唇	非円唇	円唇			
/i/	/y/	/ɪ/	/ʏ/	/ʊ/	/u/	狭
/e/	/ø/	/ɛ/	/œ/	/ɔ/	/o/	半狭
/æ/		/a/			/ɑ/	広

[ɔ] で実現される音素 /ɛ/, /œ/, /ɔ/ まで半狭に分類されている点（この点はこのあと 4. 節で正当化される）を除けば、前舌・後舌、緊張・弛緩、円唇・非円唇いずれの扱いについても特筆すべきことはない。特に緊張・弛緩の分類は、それぞれ「穏やかな切れ方」と「きつい切れ方」に対応するだけでなく、実際の調音音声学的特質も反映した、ごくオーソドックスなものと言える。

これに対し、(2) が該当する表 2 中の「広」母音については、円唇・非円唇の対立が中和される点こそ定説どおりだが、それ以外では独特な扱いが際立っている。まず、(2a) *Täler* ['tɛ:lɐ] などの [ɛ:] として実現される音素が /æ/ で表示されている。この長い母音は一般的な理解によれば、その音声表示のとおり、開口度が [ɛ] や [œ], [ɔ] と同じくらい（半広）の弛緩母音のはずだが、これを Eisenberg (42006) は音素レベルで敢えて緊張を伴う広母音として扱っている。さらに、(2b) *rate* ['ra:tə] – *Ratte* ['ratə] における [a:] と [a] のような対立を、長さではなく舌の前後位置と緊張・弛緩とで捉えている。このうち舌の前後位置に関しては、確かに標準的な変種でこそ *rate* と *Ratte* の第 1 母音はともに中舌で発音され、両者の差異は長さ（とそれに伴う音節の切れ方）のみであるが、南部のドイツ語変種などでは現に長母音が後舌の [ɑ], 短母音が中舌の [a] で発音される。標準変種の音声レベルでは失われている舌の前後位置を音素レベルで考慮すること自体は、必ずしも無理な試みとは言えない。しかし、この後舌と中舌の対立に緊張と弛緩の対立を重ねるのは不自然である。なぜなら、広（ないし低舌）母音には、舌や唇などの調音器官の張りという意味での緊張は実質的に見出し難い上、敢えて見出そうとすれば、後舌よりむしろ中舌の母音のほうが緊張している（Grewendorf, Hamm, and Sternefeld 1988: 62）からである。

このように Eisenberg (42006) の音素論は、多くの点で調音音声学的対応に縛られないことが特色である。調音音声学的対応に代わって彼が重視するのは音の分布特性だが、とりわけこの姿勢が顕著なのが緊張・弛緩の扱いである。広母音のうち /a/ を定説どおり弛緩母音とする一方、/æ/ と /ɑ/ を敢えて緊張母音と見なしているのは、そうすることで、これらの母音についても、いまから述べるようにその振舞いを狭～半狭母音のそれと共通のタームで統一的に捉えられるようになるからである。

2.1 節で見たように、音節構造によって長さを再現しようとしたタイプ 1B の試みは、非強勢母音の長さの問題を前に行き詰まる結果となったが、Eisenberg (42006) は緊張・弛緩を（調音音声学的対応の欠如に一部目をつぶってまでも一貫して）開音節をなし得るか得ないか、および、強勢を受けてはじめて長くなるのか、それとも強勢の有無に関わらず短いのか、という音節構造と長さに関わる 2 つの条件に鑑みた分布特性で規定している。

狭～半狭母音に関しては、(1e) *Koma* ['ko:ma] の開いた第 1 音節で強勢を受けて長くなる [o:] も、(5) *komatös* [ko.ma.'tø:s] の同様に開いた第 1 音節にありながら強勢を受けることなく短く留まる [o] も、どちらも、緊張という特徴の音素 /o/ の異音と分析される一方、(1e) *Komma* ['kɔma] と (6a) *Kostüm* [kɔs.'ty:m] の閉じた第 1 音節¹² において強勢の有無に関らず短い [ɔ] は、弛緩を伴う別の音素 /ɔ/ の音声的实现として説明がつく。

¹² *Komma* の [ɔ] による第 1 音節は、後続の子音 [m] が両接的であるため閉音節である。

同様に広母音についても, /æ/ と /a/ が (2a) *Täler* ['tɛ:.lə] や (2b) *rate* ['ra:.tə] などの強勢位置でいずれも長い [e:] ないし [a:] として開音節に現れる上, 強勢を受けなくても, (6c) *trainieren* [trɛ:.ni:.rən] や *Atom* [a:.to:m] などのように短く実現され, しかも当該の音節は開音節であり得る. いずれも, 当該音素が緊張母音であると仮定すれば当然の帰結である. あわせて, (2b) *Ratte* ['ratə] のように強勢を受けても, (6b) *Antenne* [an:.tɛnə] のように強勢を受けなくても, 短いまま閉音節に現れる [a] も存在する. それゆえ, 弛緩母音の /a/ もまた音素として, 緊張母音 /a/ とともに認定されるのである.

これら一連の [e:] ないし [a:] について, 調音音声学的な観点を重視するあまり音素論的にも弛緩母音であることに拘り続けられれば, このように明快な整理に至るのは難しかったであろう. こう見ると, Eisenberg (42006) には, タイプ 1B のアプローチが陥る矛盾の多くを免れるという長所を認めることができる. その意味で, 音声学的対応に重きを置かない彼の姿勢を一概に欠陥と見なすことはできない.

しかしそれでもなお, /æ/ と /a/ を緊張母音 (=開音節をなし得る母音) とする Eisenberg (42006) の措置は, ドイツ語と同じく音節型言語とされる英語の音韻論においてこれらの記号が「開音節をなせない」という基準に基いて弛緩母音に分類されている (König and Gast 42018: 18f.) にもかかわらず, ドイツ語の借用語や造語においてまさに英語の [æ] を模して現れる [e] には /æ/ という音素表示を採用できない点で, 非常に矛盾した印象を与えるのである. つまり, Eisenberg (42006) の首尾一貫性は, 音節型言語の中でももっぱらドイツ語の個別現象を記述するのに都合のよい結論先取りの分析と見られなくもない. もしそうだとすれば, 通言語的適用性を犠牲にし過ぎていることになるだろう.

加えて, 経験的にも Eisenberg (42006) の理論は問題を孕む. 長さを母音の質 (張り) と強勢の有無から生じる結果としているため, ドイツ語に少数ながら認められる (8) のような非強勢位置に現れる長母音 (Mangold 31990: 35) への対応に苦慮することになる.

- (8) a. *Mutis* ['moti:s] 「ママ, 母ちゃん」(sg.gen. ないし pl.), *Vampir* ['vam.pi:g] 「吸血鬼」, *Bistum* ['bis.tu:m] – *Bistümer* ['bis.ty:.mɐ] 「司教区」(sg. – pl.), *Demut* ['de:.mu:t] 「恭順」, *Eugen* ['ɔy.ge:n] 「オイゲン (男性の名)」, *Professor* [pro.'fɛʃo:r] 「教授」, ...
- b. *Scheusäler* ['ʃɔy.zɛ:.lə] 「化け物」(pl.), *Dromedar* ['dro:.me.da:g] 「ヒトコブラクダ」, *Heimat* ['hai.ma:t] 「故郷」, *heiraten* ['hai.ra:.tɪn] 「結婚する」, *Nachbar* ['nax.ba:g] 「隣人」, ...

このうち, (8a) に見られる狭～半狭の長母音 ([i:], [u:], [e:], [o:], ...) は, 一般的な見解でも Eisenberg (42006) の見解でも, 緊張母音に該当する. それが非強勢位置で長いのは, Eisenberg (42006) だけでなく, 2.1 節で見たようにタイプ 1B の立場にとっても想定外の事態であった. これに対し, (8b) の長い広母音 [e:] と [a:] は一般的な見解によれば弛緩母音, しかし Eisenberg (42006) によれば緊張母音の音素 /æ/ と /a/ が具現されたものということになる. この場合, タイプ 1B の立場にとって, 弛緩母音が長いことは (これもすでにそこで指摘したことだが) 重大な問題には当たらないのに対し, Eisenberg (42006) にとっては, (8a) と同様に想定外の事態であり, この (8b) の分だけ余計に問題を背負った格好である. しかも (8b) は, (8a) に全般的に見出される屈折ないし派生形態論的な動機 (後述) をしばしば欠いており, 容易に例外視することもできない. こうして分節的な音声学・音韻論の問題を解決するどころか, むしろ増やしてしまう Eisenberg (42006) の広母音の扱いは, やはり看過できない短所だと言えるだろう.

2.2.2 タイプ 2B

長・短より緊張・弛緩のほうをより本質的と見る立場のうち, タイプ 2A を代表する Eisenberg (42006) の理論的・経験的短所の根本原因が, 調音音声学的な対応を度外視した広母音の分類にあったのだとすれば, 緊張・弛緩を直接母音に帰す代わりに, 何らかの (ただし, 音節構造そのものではない) 超分節

的レベルの差異の現れと理解するタイプ 2B のアプローチには、同じ過ちを回避できる余地がなお残されていると言える。

この方向でもっとも有力な提案は Vennemann (1991) であろう。彼は、19 世紀の音声学者 Sievers (1876) の発想を現代的な音声学・音韻論の理論に仕立て直したのだが、その Sievers (1876) は、タイプ 1B の Becker (1998) を触発した Trubetzkoy (1989 [1939]) に先んじて強勢を受ける音節の切れ方を観察し、彼と事実上同じ見解に至っていた。両者のほぼ唯一の相違は、当該現象の原因を音節の構造に帰した Trubetzkoy (1989 [1939]) に対して、Sievers (1876: 115f.) は音節の強度の問題と捉えた点である。彼は、「激しい切れ方 (energisch geschnitten [独] = energetically cut [英])」と「弱い切れ方 (schwach geschnitten [独] = weakly cut [英])」の「アクセント」という言い方をしている。

Vennemann (1991) はこの発想を受け継ぎ、音節の開始とともに強度が徐々に高まり頂点に達した後、徐々に最後まで鎮まり切ったところで音節が完結する、という理想的なエネルギー・フローから出発する。次いで、エネルギー・フローの開始から頂点までの過程をクレシェンド (<), 頂点から完結までの過程をデクレシェンド (>) で表示することにした上で、これらが図 3 のように、「モーラ枠組み (Mora-raster [独] = moraic framework [英])」と称される一種の音節構造 (| ↑ | 等¹³) 上の音連鎖に重ね合わ

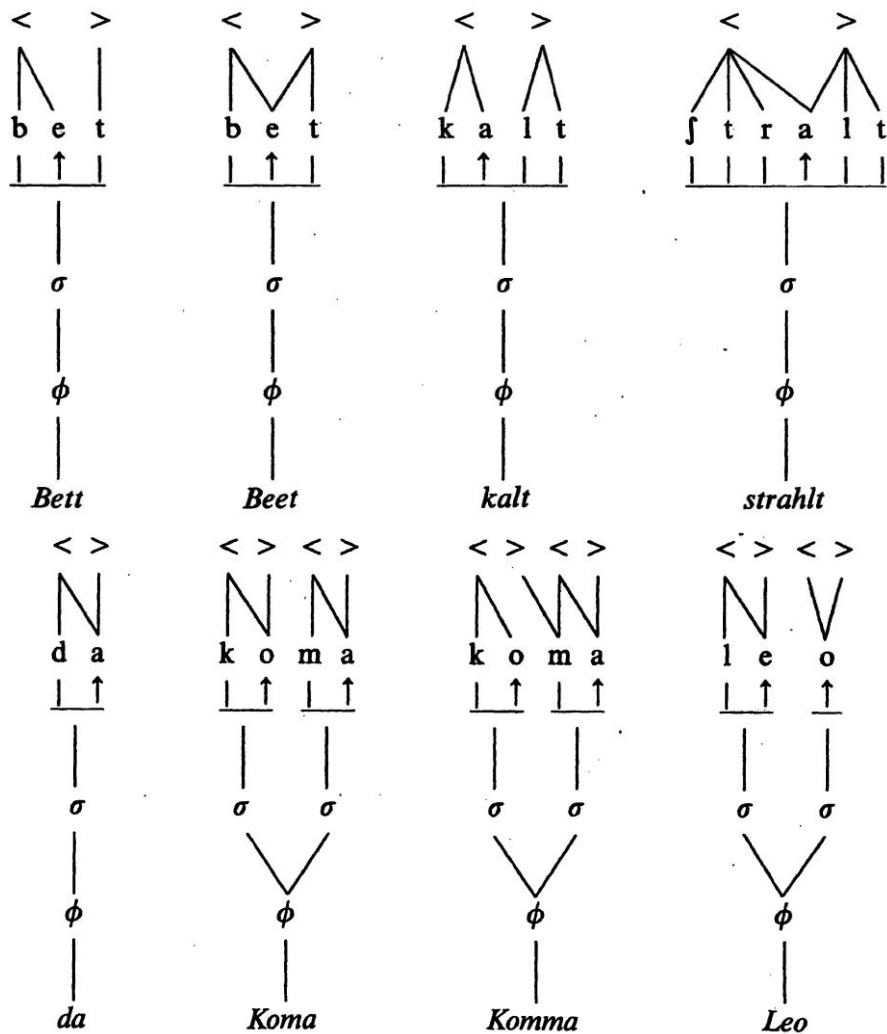


図 3 エネルギー・フロー、音節構造、「弱い切れ方」vs.「激しい切れ方」(Vennemann 1991: 94, 91)

¹³ ↑が音節構造の核、その前後の|がオンセットやコーダにおよそ相当する。

せられる。その際、< には核をなす母音と（存在する限りの）オンセットの子音が帰属する。さらに、核の母音が > にも及んでエネルギー・フローが完結すれば、開音節が得られる（図3の da ['da:]「そこ」、Koma ['ko:ma] (= (1e) 左) の両音節、Komma ['kɔma] (= (1e) 右) の第2音節、Leo ['le:ɔ]「レオ（男性の名）」の両音節）。なお、こうして母音で埋められた > には、任意に子音が加わり、閉音節となる可能性も排除されない（Beet ['be:t] (=図1左), strahlt ['ʃtra:lt]「放射する」(3.sg.prs.))。

これに対して、母音が < の段階で途絶えてしまえば、エネルギー・フロー完結のため、> が少なくとも1つの子音で埋められる必要に迫られる（Bett ['bet] (=図1右), kalt ['kalt]「冷たい、寒い」）。この要請は、仮に当該音節構造（＝モーラ枠組み）上に適当な子音が存在しない場合でも、後続音節のオンセットに子音のある限り、その最初のものが介入するかたちで満たされるという結果（図3の Komma の第2音節）を引き起こすほど強いものである。

以上をまとめると、母音が < と > の双方を占めてエネルギー・フローが完結することで、Sievers (1876) の言う「弱い切れ方」の条件が整って開音節が可能となる。これに対し、母音が < しか占めず、途中で「激しい切れ方」を引き起こせば、> を母音の代わりに後続の子音で満たしてエネルギー・フローを完結せざるを得なくなる。その結果、「激しい切れ方」では閉音節しか許されないのである。

同じく緊張・弛緩を本質的と見る Eisenberg (⁴2006) で最大の難点だった [ɛ:] や [a:] のような調音音声学的に弛緩した母音が開音節をなすことを解決するために、これを半ば強引に緊張母音に分類するような扱いを、Vennemann (1991) は意図して避けている。緊張・弛緩の差異が明確に認められる狭～半狭母音の対でさえ、音素表示を一本化しており、例えば、Koma の [o:] も Komma の [ɔ] も、音素としては一様に /o/ で表示している。かといって、開音節をなし得るかどうかという条件を無視しているわけではなく、母音が < と > の両方に跨がるか否かの発現として、むしろ理論の中核に据えている。こうして緊張・弛緩の差異を母音に内在する特徴として仮定することなく、開音節の可否に加えて強勢の有無も考慮することで、タイプ1Bや2Aで達せられたことはVennemann (1991) でも達せられることになる。例えば、Koma ['ko:ma], komatös [ko.ma.'tɔ:s], Komma ['kɔma], Kostüm [kɔs.'ty:m] の各第1母音や一連の [a(:)] がどのような音韻過程を経て実現されるかは、Vennemann (1991) でも適確に説明される。

それに加えてVennemann (1991) では、他の先行研究を袋小路に追い込んでいた難題も最小化される。(8)の母音が強勢を受けることなく長い、という例外は、Vennemann (1991) の枠組みを用いることで、少なくとも、< と > の両方に跨り得る母音のうち、強勢音節にも非強勢音節にも現れ得るものに限られる、というところまで一般化することができるだろう。この「< と > の両方に跨り得る」は、言い換えれば「開音節をなせる」ということだが、この性質は、タイプ1Bが重視した長さによっても、タイプ2Aが重視した張りによっても、どちらによっても完全には置き換えられないものであった。その分、Vennemann (1991) は理論的抽象度が高く、説明力がより強力である。こうして既存の他の枠組みでなし難い一般化をなし得る点で、Vennemann (1991) は先行研究の中でもっとも首尾一貫し、説得力のある理論になっていると言えるかもしれない。しかし、それでも問題はあつた。2点、指摘したい。

まず、[e]–[ɛ:]–[ɛ]–[ɛ:] のどの音がどの音素からどんな条件の下で具現するのか、という経験的な課題がある。この問いへの解答は、緊張・弛緩が音素レベルで弁別的な Eisenberg (⁴2006) の枠組みでは(9)のようになるであろう。2.1節等ですでに指摘したいいくつかの問題（特に /ɛ/ と /æ/ の扱い）を挙げれば、おおむね明快と言える。これに対してVennemann (1991) は、開口度だけで区別される2つの音素 /ɛ/ と /ɛ/ から出発する(10)のような音韻過程を構想していると思われる。

(9) 音素と弁別の特徴	音声的具現 / 具現条件	例
a. /ɛ/ [半狭] [緊張]	→ [ɛ:] / 強勢	(1d) <u>bɛ</u> ten ['bɛ:.tɪn]
	→ [ɛ] / 非強勢	(5) <u>E</u> lement [e.le.'ment]

b. /e/ [半狭] [弛緩]	→ [ɛ]	(1d) <u>B</u> etten ['bɛtɐ], (6b) <u>B</u> ettina [bɛ'tiːna]
c. /æ/ [広] [緊張]	→ [ɛ:] / 強勢	(2a) T <u>ä</u> ler ['tɛː.lɐ]
	→ [ɛ] / 非強勢	(6c) tr <u>a</u> inieren [trɛ.'niːrən]
(10) 音素と弁別の特徴		
	音声的具現 / 具現条件	例
a. /e/ [半狭]	→ [e:] / <>, 強勢	(1d) <u>b</u> eten ['bɛːtɐ]
	→ [e] / <>, 非強勢	(5) <u>E</u> lement [ɛ.le.'ment]
	→ [ɛ] / <	(1d) <u>B</u> etten ['bɛtɐ], (6b) <u>B</u> ettina [bɛ'tiːna]
b. /ɛ/ [半広]	→ [ɛ:] / <>, 強勢	(2a) T <u>ä</u> ler ['tɛː.lɐ]
	→ [ɛ] / <>, 非強勢	(6c) tr <u>a</u> inieren [trɛ.'niːrən]

/e/ も /ɛ/ も <> に跨る条件下で開音節に現れ、強勢を受ければ長く、受けなければ短くなるところまでは、それぞれ [e:] と [e], [ɛ:] と [ɛ] という別個の音があるので明快である。しかし、< のみに帰属し、強勢を受けても受けなくても短く留まるケースで実現される音は [ɛ] しかなく、これが /e/ と /ɛ/ のどちらの異音なのかはにわかには判断がつかない。Vennemann (1991: 103ff.) 自身は、省略語や口語における音推移の一環として (11) のような現象 (= 開音節の [e] が 閉音節 (= 後続子音が関節) の [ɛ] になる現象) に触れていることから、件の [ɛ] は /e/ の異音であると見ているようである。

(11) a. Religion [re.li.ɡi.'o:n] 「宗教」 → Reli ['rɛli] 「(学校の) 宗教の授業」

b. deprimiert [de.pri.'mi:ɐt] 「意気消沈した」 → [dɛpri.'mi:ɐt]

こうした音推移現象はドイツ語の下位変種の問題に密接に関わる。必ずしも同一音素の異音として解決されるべきとは限らず、音素次元での入れ換えの可能性も排除されない。それだけに、Vennemann (1991) の判断が正しいかどうか以前に、こうした判断に迫られる原因がそもそも彼の理論の作り自体にある、という点を強調しておきたい。異音の帰属の問題で問われているのは、<> と < の対立が音素レベルから独立的かつ一貫してドイツ語に存在する、という彼の基本的立場の妥当性にほかならないのである。

2 点目の問題も、この点に関わる。上述のとおり Vennemann (1991) の理論は、2 種類の音節の切れ方を強度の現象と見る Sievers (1876) から着想を得たものだが、この着想が経験的に確かな基盤に基づいているのかが疑わしい。Sievers (1876) の言う「弱い切れ方」と「激しい切れ方」、ないし Trubetzkoy⁷1989 [1939] の言う「穏やかな切れ方」と「きつい切れ方」は、Vennemann (1991) ではそれぞれ <> の両方に跨る母音と < にしか付かない母音として説明されるわけだが、もしこの説明が正しいのであれば、前者では強度の頂点が当該母音の持続時間の中ほどに、後者では終端近くに位置するものと予測される。

しかし、Spiekermann (2002: 187ff.) による実験音声学的分析が示した結果は、この予測を反駁するものである。強度の頂点が持続時間終端近くに現れたのは「穏やかな (= 弱い) 切れ方」のほうであり、「きつい (= 激しい) 切れ方」では頂点が持続時間の中央か、むしろ前半に来る傾向が顕著だったのである。さらに、この傾向は [a:] – [a] と [e:] – [ɛ] の対においてのほうがその他の対においてよりも格段に際立っていた。これは、緊張母音と弛緩母音の差異が明確である開口度の低い環境 (つまり、[i:] – [ɪ], [u:] – [ʊ] などの対) においてほど (正の方向であれ、負の方向であれ) エネルギー・フローとの相関性が「低い」ことを示唆する結果である。Sievers (1876) に基づいた Vennemann (1991) は、確かに理論的シナリオとしては精緻かつ首尾一貫し、説明力も高いものかもしれないが、こうした (Sievers 1876 の時代には得るべくもなかった) データによって発想の根本が揺らぐ結果になったと言わざるを得ないだろう。

3. ドイツ語主母音の非強勢位置における音節的振舞い

前節では、先行研究の代表的なアプローチを取り上げ、そのいずれもが — 特長や長所とともに — 理論的ないし経験的な問題を抱えていることを明らかにした。その過程で、長・短と緊張・弛緩のいずれをより本質的と捉える立場においても、両者の相互関係が事実上、強勢位置でしか比較・検討されていなかったという方法論的不備が浮き彫りになった。非強勢位置には、(6) のように弛緩した短母音も、(8) のように緊張した長母音も、どちらも現れ得るのだが、長さから出発する立場にとってはその両方が、張りから出発する立場にとっては後者のケースが、ネックなのである。

そこで、以下では非強勢位置における母音の音節的振舞いを確認・整理し、強勢位置での振舞いと突き合わせることにしたい。ここまで先行研究を振り返る過程を通じ、ドイツ語の母音は、(i) 強勢位置で長く、開音節をなし得る緊張母音 ([i:], [y:], [u:], [e:], [ø:], [o:]), (ii) 強勢位置で短く、閉音節しかなさない弛緩母音 ([ɪ], [ʏ], [ʊ], [œ], [ɔ]), (iii) 強勢位置で長くも短くもなり得、長いときには開音節をなし得る弛緩母音 ([ɛ:]–[ɛ], [a:]–[a]) という 3 つに便宜上、分けて観察すると見通しを得やすいことが分かった。本節でもこの順序で、各々の母音が非強勢位置でどのような音節的振舞いを見せるのか — つまり、開音節と閉音節（両接的な子音で閉じられるものを含む）のいずれを（も）なすのか、その際、長さはどうなるのか — を観察する。非強勢位置としては、強勢（主強勢）の前か後かを区別し、それぞれ「強勢前（位置）」、「強勢後（位置）」と呼ぶことにする。

3.1 強勢位置で長く、開音節をなし得る緊張母音 ([i:], [y:], [u:], [e:], [ø:], [o:])

これらの母音は、すでに言及したとおり、非強勢位置で通例、短く実現される。その際、前節の例示(5) ではすべて強勢前に当該母音が現れる事例を挙げていたが、強勢後に現れる事例も存在する。それぞれを(12a)と(12b)で提示しよう（このうち(12a)は(5)の再掲）。

- (12) a. vielleicht [fɪ.'laɪçt] 「ひょっとしたら」、Physik [fy.'zi:k] 「物理学」、Musik [mu.'zi:k] 「音楽」、Element [ɛ.le.'ment] 「要素」、lebendig [le.'ben.dɪç] 「生き生きした」、Ökonomie [ø.ko.no.'mi:] 「経済（学）」、komatös [ko.ma.'tø:s] 「昏睡状態の」、...
- b. Mutti [ˈmotɪ] 「ママ、母ちゃん」、Uhu [ˈu:u] 「ワシミミズク」、Auto [ˈaʊ.to] 「自動車」、...

ここで特筆すべきことは2点ある。ひとつは、当該の緊張母音が強勢位置に現れるときには（比較的まれとはいえ）閉音節もなし得るのに（例：gibst [ˈgi:ps̩t] 「与える」(2.sg.prs.)、Mond [ˈmo:nt] 「(天体の)月」、...）、非強勢位置に現れる限りは — 強勢前であれ強勢後であれ — 基本的に開音節しか形成しない¹⁴ こと、もうひとつは、(12a)の環境に現れる母音の一部 — 具体的には、円唇前舌母音の [y] と [ø]、および半狭の非円唇前舌母音 [ɛ] — が(12b)に見られないことである。このうち後者には歴史的な背景がある。

円唇前舌母音の [y] と [ø] は元来、音韻論的な「ウムラウト」 — つまり、語幹の後舌母音が /i/ を含む語尾に後続されると前舌化する現象 — によって得られる母音だったが、やがて語尾の母音の種類が制限され、/i/ が他の /u/ や /e/ などとともにシュワーに取って代わられると、「ウムラウト」はもはや音連接的に条件づけられる現象ではなくなった。つまり、かつて同一音素の異音として円唇後舌母音と交替する関係にあるだけだった円唇前舌母音は、この異音関係を脱し、一個の音素として独立したので

¹⁴ 「基本的に」としたのは、すでに(7)左に挙げた Taxis [ˈtak.sɪs] 「タクシー」(pl.) の第2母音のような事例があるからである。ここでは当該母音に複数形の屈折語尾として子音 [s] が後続しているが、短い緊張母音が非強勢位置で閉音節をなす事例は、もっぱらこの -s 語尾による屈折に与っている。この語尾については、本節でこのあと取り上げる。

ある。すると、この音素によって構成される語幹は、その「円唇かつ前舌」という二重に正の弁別的特徴に見合うだけの形態論の標示機能（わけでも名詞の複数性や動詞の接続法を標示する機能）に与るようになる。こうして [y] と [ø] は、語幹の形式と機能の双方にとって意義ある母音として、もともと「ウムラウト」母音の前提条件だった強勢位置に現れるという性格を薄めるどころかいつそう強化する一方、語尾に現れる動機の方は依然欠いたままである。その結果としてこの2つの母音は、強勢後位置には分布しない。

これに対し、[e] が強勢後に現れない訳は、シュワーとの関係性に求められよう。シュワーは、いま述べたとおりの事情から、形態論で語幹が主導的役割を果たすようになった現代のドイツ語（ないし一般的にゲルマン語）において、語尾の表現用にはもはや冗長となってしまった主母音の機能を集約する母音である。この母音は、調音音声学的には、広くも狭くもなく、前舌でも後舌でもなく、円唇でもない、というふうに消極的にしか規定されないが、この性質にもっとも近い主母音は [e] である。[e] は、前舌性以外に正の調音的特性を持たず、主母音のうちシュワーとの差異の構造がもっとも単純なものだが、それだけにシュワーとの区別が原理的にもっとも危うい母音でもある。語幹の担い手 vs. 語尾の担い手という双方の機能分担を最大限担保するには、両者が相補的に分布することが望ましい。こうして、主母音のうち [e] は、シュワーが優先的に実現される環境である強勢後位置には現れないのである。

ここまでは、緊張母音が非強勢位置で短くなるケースを見たが、緊張母音は、すでに (8a) で示したとおり、非強勢位置で長いままのこともある。(8a) には強勢後の事例しか挙げていなかったが、強勢前の事例も存在する。そのような事例を (13a) として (8a) = (13b) とともに掲げる。

- (13) a. wiederholen [vi:.dɐ.'ho:.lən] 「繰り返す」, widerhallen [vi:.dɐ.'ha:lən] 「反響する」, überfallen [y:.bɐ.'fa:lən] 「襲撃する」, Stuterei [ʃtu:.tə.'raɪ] 「馬繁殖場」, Blödelei [blø:.dɐ.'laɪ] 「馬鹿げたこと」, ...
b. Mutis ['moti:s] 「ママ, 母ちゃん」 (sg.gen. ないし pl.), Vampir ['vam.pi:ɐ] 「吸血鬼」, Bistum ['bis.tu:m] – Bistumer ['bis.ty:.mɐ] 「司教区」 (sg. – pl.), Demut ['de:.mu:t] 「恭順」, Eugen ['ɔy.ge:n] 「オイゲン (男性の名)」, Professor [pro.'fɛʃo:ɐ] 「教授」, ...

このように、当該の事例は決して少なくないのだが、いずれも音声学的・音韻論的というよりは形態論的に条件づけられた現象と考えられる。

まず、(13a) について、この強勢前という環境に現れる長い緊張母音は、いわゆる「非分離動詞」の接頭辞のうち2音節であるものの第1母音、ないし、集積的意味の名詞を派生する接尾辞 -ei/elei/erei を施された基盤語の幹母音である。前者の接尾辞は、その一部 (wiederholen の wieder- や überfallen の über-) がいわゆる「分離動詞」にも現れ、そこでは当該の第1母音が強勢を受ける上 (wiedersehen ['vi:.dɐ.ze:.ən] 「再会する」, überfallen [y:.bɐ.'fa:lən] 「垂れかかる」), 分離前綴りに対応しない接頭辞も含め、当該動詞が接尾辞なしで名詞に転換 (conversion) されれば、やはり第1母音が強勢を受けることになる (widerhallen [vi:.dɐ.'ha:lən] > Widerhall ['vi:.dɐ.ha] 「反響, こだま」, überfallen [y:.bɐ.'fa:lən] > Überfall [y:.bɐ.fal] 「襲撃」). 後者の派生接尾辞 -ei/elei/erei は、外来でない土着の派生接尾辞の中では唯一、基底語の強勢をみずからに引き寄せる性質を持ったものである (Stuterei [ʃtu:.tə.'raɪ] < Stüte ['ʃtu:.tə] 「(成熟した) 雌馬」). どちらも、元来強勢を受けて長く実現されるはずの緊張母音が、特定の派生形態論的条件の下、強勢こそ失うものの、長さを保つ現象であると考えられる。

(13b) の背景はさまざまである。もっとも明確に条件づけられた現象は、Mutis ['moti:s] 「ママ, 母ちゃん」 (sg.gen. ないし pl.) のように、名詞の単数・属格や複数性を標示する -s に後接される緊張母音である。この屈折語尾としての -s は外来語を中心に近代になって広まったものだが、伝統的な語尾を集約した -e や -es, -en などのシュワー語尾が、音節数の増大によって類像性 (iconicity) の原理に適う

(つまり, 無標の単数・主格形より有標の単数・属格形や複数形のほうが, 有標性の多さに対応するかたちで音節数が増える; Fuß ['fu:s]–Füßə ['fy:.sə]「足」(*sg.nom-pl.*), Haus ['haʊs]–Hauses ['haʊ.zəs]「家」(*sg.nom-sg.gen.*), Frau ['fraʊ]–Frauen ['fraʊ.ən]「女性」(*sg.nom-pl.*)) のに対し, シュワーを決して伴わない -s 語尾では音節数が増えない代わりに語末音節の母音の長さが増大し得る (Mutti ['mʊti]–Mutis ['mʊti:s] (*sg.nom.-sg.gen./pl.*), Uhu ['u:.u]–Uhus ['u:.u:s]「ワシミミズク」(*sg.nom.-sg.gen./pl.*), Auto ['aʊ.to]–Auto ['aʊ.to:s]「自動車」(*sg.nom.-sg.gen./pl.*)). ただし, 短いままの語形も容認される (['mʊtis], Uhus ['u:.us], ['aʊ.tos]; さらに (7) 左に挙げていた Taxis ['tak.si:s]). つまり, 非強勢位置の緊張母音は, さきほど (12) の関連で確認したように原則的に開音節しかなさないため, -s 語尾という屈折形態論の際立った条件によって閉音節化を強いられると, その長さに揺れが生じる結果となるのである。

これに次いで条件が明確なのは Proféssor [pro.'fɛ.so:ɐ̯]「教授」のケースであろう。この -or という, 主として動作主や道具を示す派生接尾辞に終わる名詞は, (屈折的語形変化の際には強勢が一貫して語幹に留まるドイツ語にしては珍しく) 複数形で接尾辞 -en を伴うと強勢が -or の [o:] のほうに移動する (Proféssor [pro.'fɛ.so:ɐ̯]–Proféssoren [pro.fɛ.'sɔ:.rən]; そのほか Áutor ['aʊ.to:ɐ̯]–Áutoren [aʊ.'tɔ:.rən]「執筆者」, Diktátor [dik.'ta:.to:ɐ̯]–Diktátoren [dik.ta.'tɔ:.rən]「独裁者」, Mótor ['mo:.to:ɐ̯]–Mótoren [mo.'tɔ:.rən]「エンジン, モーター」, Sénsor ['zɛn.zo:ɐ̯]–Sénsoren [zɛn.'zɔ:.rən]「センサー」など多数). Vámpir「吸血鬼」も — -or のようにパターン化こそされていないが — 同様に屈折的語形変化で強勢が [i:] に移動する名詞である (Vámpir ['vam.pi:ɐ̯]–Vámpire [vam.'pɪ:.rə]). さらに, 固有名詞として屈折らしい屈折をしない Éugen ['ɔy.ge:n]「オイゲン」にも, Eugén [ɔy.'gɛ:n] と発音する異形が存在する (Mangold³1990: 285)。

他方, Bistum ['bis.tu:m]–Bistumer ['bis.ty:.mɐ̯]「司教区」(*sg.-pl.*) では, 屈折に際して強勢の移動はなく, しかも長い [u:]/[y:] が単・複を通じて強勢後に生じる。ここで特別なのは, -tum という派生接尾辞である。この派生接尾辞で終わる名詞は, 複数を標示するとすれば, シュワー語尾の一種である -er [ɐ̯] を用いるが, この語尾による複数形の形成は一般的に, 単数形がすでにシュワーで終わっている名詞には適用されず, 可能な限り幹母音の「ウムラウト」も伴う。そのような複数形の形成方法が, シュワーを含まない -tum で終わる派生的名詞には原理的に適用可能なわけだが, それに付随する「ウムラウト」は(基底語の幹母音ではなく) -tum のほうの母音によって担われる。つまり, この -tum は機能的に見て派生接尾辞であるものの, 音韻論的には(強勢を受けない語尾ではなく) 強勢を受ける語幹のように振舞う点で独特なのである。なお, このような, -er 語尾で複数形を作る名詞を派生する接尾辞に見られる語幹のような振舞いについては, さらに別の事例を対象に 3.3.1 節でより掘り下げることになる。

最後に, Demut ['de:.mu:t]「恭順」は, Anmut ['an.mu:t]「優雅」や Hochmut ['hox.mu:t]「高慢」, Übermut ['y:.bɛ.mu:t]「思い上がり」, Wehmut ['ve:.mu:t]「郷愁」といった一連の, -mut を共有する複合語と同類に捉えられる。複合語の常として, 第 1 構成語にあたる De- が — 確かに単独の語としては存在しないものの, クランベリー形態として — 強勢を引き受ける一方, 単体で「勇気」を意味する Mut ['mu:t] という語になぞらえられる -mut は, 第 2 構成語として, 強勢こそ失えど, 幹母音の長さを留めるのである。

以上をまとめると, 緊張母音が非強勢位置に現れるとき, (13) のように屈折形態論のパラダイムや派生形態論の過程といった純粋に音声学的・音韻論的でない条件によって特別に動機づけられない限り, その長さは — 短くなる。あわせて, 強勢位置で可能だった閉音節をなすことも原則的になく, 開音節しか実現されない。

3.2 強勢位置で短く, 閉音節しかなさない弛緩母音 ([ɪ], [ʏ], [ʊ], [œ], [ɔ])

この類の弛緩母音も, すでに 2.1 節で触れたとおり, 非強勢位置に現れ得る。(6a) = (14a) に挙げていた, 当該母音が強勢前に現れる事例に加え, 強勢後に現れる事例も (14b) に補っておく。

- (14) a. imposant [ɪm.po.'zant] 「感銘を与える」, sympathisch [zym.'pa:ɪtʃ] 「好感が持てる」, punktuell [pʊŋk.'tʉɛl] 「点の」, Nörgelei [nœr.gə.'lai] 「文句, 小言」, Kostüm [kɔs.'ty:m] 「衣装」; illegal [ɪle.'ga:l] 「不法な」, Supplement [zʉple.'ment] 「補遺」, Kommunist [kɔmu.'nist] 「共産主義者」, ...
- b. Ärztinnen ['erts.tɪnən] 「女医」(pl.), Könige ['kø:.nɪgə], Wohnungen ['vo:.nʉŋən] 「住居」(pl.), Kosmos ['kɔs.mɔs] 「宇宙」, ...

いずれも長さに短く、閉音節しかなさない点が、強勢位置に現れる場合と共通する。ただし、円唇前舌母音の [y] と [œ] は、強勢後位置には分布しないようである。3.1 節で見た緊張母音 [y(:)], [œ(:)] と共通の歴史的背景がここにも作用していると考えられる。

興味深いのは、「きつい切れ方」(Trubetzkoy⁷1989[1939]) ないし「激しい切れ方」(Sievers 1876) の事例である。強勢前の環境では、(円唇前舌母音を除く) すべての母音にこの切れ方の事例((14a) の illegal [ɪle.'ga:l] 以下) が見つかる。強勢後の環境では、管見の限り、半広の [ɔ] にそうした事例が見当たらないものの、狭い [ɪ] と [ʊ] の直後にはやはり両接的な子音が続き得る((14b) Ärztinnen ['erts.tɪnən] や Wohnungen ['vo:.nʉŋən])。こうした「きつい切れ方」の事例には、当該母音の語幹表示機能が色濃く反映している。というのも、そうした事例はいずれも、一部の、語幹と親密な関係にある接辞的な要素によって引き起こされているからである。

(14a) に挙げた強勢前の「きつい切れ方」は — Rossini [rɔ'si:ni] 「ロッシーニ」のような外国人名を除いて事実上 — 接頭辞 in- [ɪn] 「非, 不」, sub- [zʉp] 「下位の」, kon- [kɔn] 「共通の」の末尾子音が後続の子音と同化し、一体化された結果である ([ɪn] + [le...] → [ɪl] + [le...] → [ɪle...], [zʉp] + [ple...] → [zʉple...], [kɔn] + [mu...] → [kɔm] + [mu...] → [kɔmu...])。これらの接頭辞は、ときに複合語の第1構成語のように(主)強勢を持つこともある(例: inadäquat ['ɪn.a.de.kva:t] 「不適切な」, Subkultur ['zʉp.kol.tu:ʁ] 「サブカルチャー」, Kontext ['kɔn.tekst] 「文脈」)。この点でそれ自体が語幹的な振舞いを見せるものである。

(14b) の強勢後位置で [ɪ] と [ʊ] に続く子音が両接的になる現象は、-in [ɪn] や -ig [ɪg], -ung [ʉŋ] などの、一部の派生接尾辞として機能し得る音連鎖に負っている。-in は男性名詞 Arzt 「医者(男性)」に後接して女性名詞 Ärztin 「女医」を、-ig は名詞 Blut 「血」に後接して形容詞 blutig 「血の」を、-ung は動詞 liefern 「配達する」の語幹 liefer- に後接して名詞 Lieferung 「配達すること, 配達されるもの」を派生するが、当該の音連鎖はこうした通常の派生パターンを超えて現れることもある。すなわち、-in の場合、例えば男性名詞 Zauberer ['tsao.bə.rɐ] 「魔法使い」に対する「魔女」が Zaubererin ['tsao.bə.rə.rɪn] となるはずのところ (cf. Fahrer ['fa:.rɐ] 「ドライバー(男性)」-Fahrerin ['fa:.rə.rɪn] 「ドライバー(女性)」), 複合語でもないのに音節数が4つにまで増大し、語頭の強音節のあと弱音節が3つも連続する韻脚(foot)が形成されるのが敬遠され、実際には3音節の Zauberin ['tsao.bə.rɪn] として — つまり、-in [ɪn] が男性名詞末尾にあったシュワー [ɐ] を押し退けるかたちで — 実現される。また、-ig は、上掲 Königin の派生元となる König や Käfig 「かご, 檻」などの名詞の語末に現れる場合、派生接尾辞とは言い難い。さらに -ung は、上掲 Wohnungen 「住居」が一見したところ動詞 wohnen 「住む」からの派生語のようにいて、実は「住むこと」という過程を意味しないし、Zeitung 「新聞」に至っては派生元として zeiten という動詞すら存在しない。こうした現象まで視野に入れると、当該の音連鎖に共通する機能は、特定の派生を行うことではなく、特定の屈折クラス — -ig で終わる名詞は複数形を語尾 -e [ə] で形成し、-in や -ung で終わる名詞は -en [ən] で形成する — を標示することにあると考えられる。どの語の語幹がどの屈折接辞を伴うのかを明らかにするという点で、-in や -ig, -ung などの接尾辞的要素は、語幹に付属する語尾というよりは語幹の一部である。そして、そうした語幹的な環境が、強勢を伴わない位置でも「きつい切れ方」を可能にしているのである。

3.3 強勢位置で長くなり得、開音節もなし得る弛緩母音 ([ɛ] – [ɛ:], [a] – [a:])

弛緩母音の中では開口度の(比較的)高い [ɛ] と [a] だけが、強勢位置において長くなり得、かつ開音節もなし得たが、非強勢位置ではどうか。2. 節では、長・短をより本質的と見る立場にとっても、緊張・弛緩をより本質的と見る立場にとっても、非強勢位置で長い母音が難題となることを確かめた。さらに、開口度の(比較的)低い緊張母音と弛緩母音を観察した 3.1 と 3.2 では、非強勢位置においていずれの母音も原則的に短いこと、その際、緊張母音はもっぱら開音節を、弛緩母音はもっぱら閉音節をなすことが判明した。それだけに、焦点は、[ɛ:] と [a:] が長いこと、および短い [ɛ] と [a] が開音節をなし得ることが、ドイツ語の音声学・音韻論の規則的現象なのか、それとも屈折や派生の形態論等の特別な条件に負った例外なのかに絞られたと言える。以下、[ɛ] – [ɛ:], [a] – [a:] の順に観察して行く。

3.3.1 [ɛ] と [ɛ:]

短い [ɛ] については、強勢前の閉音節に現れる例 (15a), 強勢後の閉音節に現れる例 (15b), 強勢前の開音節に現れる例 (15c) が見つかる。

- (15) a. empfehlen [ɛm.'pfe:.lən] 「推薦する」, entstehen [ɛnt.'ʃte:.ən] 「成立する」, erlöschen [ɛɣ.'ləʃn] 「(火が) 消える」, verlieren [fɛɣ.'li:.rən] 「失う」; Effekt [ɛ'fɛkt] 「効果」, Ellipse [ɛ'lip.sə] 「省略」, Terrorist [tɛro.'rist] 「テロリスト」, ...
- b. elend [e:.lənt], elendig [e:.ləndiç] 「惨めな」, Elisabeth [e.'li:.za.bɛt] 「エリーザベト (女性の名)」
- c. trainieren [trɛ.'ni:.rən] 「トレーニングする」, tätowieren [tɛ.to.'vi:.rən] 「タトゥーを入れる」, präfigieren [prɛ.fi.'gi:.rən] 「接頭辞を付ける」, Präsident [prɛ.zi.'dent] 「大統領, 議長, 総裁」, Zäsur [tsɛ.'zu:ɐ] 「区切り, 切れ目」, ...

(15a) における [ɛ] は主として、1 音節から成る「非分離前綴り」emp-, ent-, er-, ver- の核に現れている。このうち、emp- と ent- は同一接頭辞の異形態として相補的に分布する¹⁵ が、ここに挙げた empfehlen では、語幹を共有する非接頭辞動詞 fehlen 「欠ける」が今日、規則変化(弱変化)する動詞となっているにもかかわらず、語幹の交替を伴う不規則変化(強変化)が保たれているし(fehlen – fehlte – gefehlt; empfehlen – empfahl – empfohlen)、ver- による verlieren (やはり不規則変化)では、対応する非接頭辞動詞は失われている(*lieren)。さらに、er- による erlöschen も、これらに連なる不規則変化動詞である(erlöschen – erlisch – erloschen)。対応する非接頭辞動詞 löschen は存在こそするものの、もっぱら規則変化(弱変化)の他動詞として「(火に限られないさまざまなものを) 消す, 消去する」の意味で用いられ(löschen – löschte – gelöscht)、不規則変化の自動詞としてはほぼ廃れてしまっているのである。こうして、いずれの前綴りも、基底の動詞からまったく規則的に別の動詞を派生する接頭辞とは言い難い。それだけに、こうした前綴りの核をなし弱く実現される短母音 [ɛ] は、音声学的・音韻論的に見て語幹に現れる主母音に準じた性質を示していると言える。

(15a) の残りの例は外来語だが、[ɛ] が「きつい切れ方」を — (6b) に挙げていた Bettina [bɛ'ti:.na] のような人名に限らず — 強勢前位置で広く可能にしていることを示すものである。このうち Effekt [ɛ'fɛkt] と Ellipse [ɛ'lip.sə] は、派生接頭辞 ex- [ɛks] 「外で, 外へ」の異形態としての [ɛ] の下で生じた「きつい切れ方」の例である。ここでは、接頭辞末尾の子音が後続する子音に同化し、一体化した結果、両接性が実現されている ([ɛks] + ['fɛ...] → [ɛf] + ['fɛ...] → [ɛ fɛ...])。これは、3.2 節で取り上げた in- や sub-, kon- の場合と共通で、しかも、ときに複合語の第 1 構成語のような(主)強勢を受け得る点(例:

¹⁵ emp- は [f] で始まる強変化語幹の一部に前接し、その他の語幹には ent- が付く。

Ex-Minister ['eks.mi.nis.tə]「元大臣」)でも、ex- はそれらの接頭辞と同様の語幹的振舞いを見せるものである。他方、Terrorist [təro.'rist] にこうした接頭辞的要素は関与していない。それでも [ɛ] は、語幹に属する限り強勢前位置でも「きつい切れ方」を引き起こし得るのである。

こうして、強勢前位置の [ɛ] が語幹への帰属性の高い条件の下で生起するのに対し、同じ母音が強勢後位置で閉音節をなす (15b) は、形態論的・語彙的に周辺的な現象である。そもそも該当する事例が — 筆者による探索の限り — ここに示した事実上 2 例くらいしか見当たらない。このうち elend ['e:.lənt] とそれからの派生語 elendig ['e:.lən.dɪç] では、基底語 elend が語源的に anderes Land「異国」という表現に相当する句から転換されたもの (国松ほか [編] 1985: 616f.) である上、強調の目的で当該 [ɛ] による第 2 音節が (第 1 音節 [e:] とともに) 主強勢を担うこともある (['e:.lən.dɪç] ; Mangold ³1990: 272)。もうひとつの事例 Elisabeth [e.'li:.za.bɛt] は、固有名詞ゆえに派生の可能性が限られる中、-isch に終わる形容詞 elisabethanisch [e.li.za.bɛ.'ta:.nɪʃ]「エリザベス王朝の」になると、当該の [ɛ] が [e] に交替する。この場合、どちらの母音も非強勢位置にあるには違いないが、派生の結果、強勢が後ろにずれることで、前者の [ɛ] は強勢後位置、後者の [e] は強勢前位置にあることになる。これに関連して、非強勢位置において短く実現される緊張母音 [e] が強勢前にしか分布せず、閉音節もなさなかったこと (3.1 節) を思い出されたい。基底語で当該母音が現れる「強勢後の閉音節」という環境に [e] は生起しないのである。とはいえ、そうであるならば、代わりにシュワーが現れ、しかも [ə] になることも可能なのだから、音声学的・音韻論的にはシュワーが生起してよいはずである。しかし、それが阻まれるのは、シュワーの音節で終わる [e.'li:.za.bɛt] が、今日 -s 語尾を除いて屈折的な語形変化を示すことがまれである固有名詞の語形としては異様だからである。このように (14b) は、数少ない事例のいずれもが、特別な形態論的・語彙的条件に動機づけられている。それだけに、音声学的・音韻論的な原則として、短い [ɛ] は強勢後位置に分布しないと見てよいだろう。

短い [ɛ] についての最後として、この母音が開音節をなす (15c) では、確かにどの事例も語源的に外来語由来であるが、動詞の例も名詞の例もあり、数的に決して少なくない上、当該の語はシュワー語尾で屈折し、さらに、しばしば土着の派生接尾辞とさえ交替する (tätowieren [tɛ.to.'vi:.rən] (inf.) > Tätowierung [tɛ.to.'vi:.rʊŋ]「タトゥー」、Präsident – Präsidenten [prɛ.zi.'dɛn.tʲ] (pl.) > Präsidenschaft [prɛ.zi.'dɛnt.ʃaft]「大統領等の職務、任期」)。このことから、当該の事例は今日のドイツ語の — 音声学的・音韻論的側面も含めた — 体系の中心に統合されたものであると言える。そのような事例に現れる母音として (15c) の短い [ɛ] は (15a) のそれとともにひとつの音素をなす可能性が排除されない一方、弛緩母音ながら開音節に現れ得る点で 3.2 節の弛緩母音 (閉音節にしか現れなかった) とは明らかに一線を画している。

次いで、長い [e:] に目をやると、これが強勢前位置に現れる事例はどうやら見当たらない。また、強勢後に現れる事例もごくまれであり、しかも、(16) のとおり開音節をなすものばかりである。

(16) Scheusäler ['ʃɔy.zɛ:.lə]「化け物」(pl.), Denkmäler ['dɛŋk.mɛ:.lə]「記念碑」(pl.), ...

「開音節なすものばかり」と推定するのは、当該の事例がことごとく語尾 -er [v] による複数形の名詞であり、しかも、音節数が 3 つで、強勢が第 1 音節にあるものばかりだからである。複数形を標示する -er 語尾は、すでに 3.1 節で述べたとおり、強勢のある幹母音に可能な限りの「ウムラウト」をもたらすとともに、音節をなすシュワー語尾のひとつとして、単数形がそもそもシュワーを含む音節で終わる 2 音節以上の単一形態素語には適用されない。もし -er に終わる 3 音節の複数形が得られたとすれば、その語は単数形の実最終音節、複数形の後ろから 2 番目の音節に強勢を有する派生語である (例: Gesicht [gə.'zɪçt] – Gesichter [gə.'zɪç.tɛ]「顔」 < sehen「見る」)。また、派生語であれなかれ、幹母音と語尾 -er [v] のあいだに複数の子音が入ることで複数形の後ろから 2 番目の音節が子音で閉じられることになるのは、

幹母音が短い場合のみである（例：Wald ['valt] – Wälder ['vel.dɐ] 「森」）。そのような -er 語尾が適用された結果として、3 音節、かつ後ろから 2 番目の音節が開音節で、そこに強勢のない複数形 (16) が得られたということは、当該の語が単成語ではなく複合語である可能性を示している。

実際 Denkmäler 「記念碑」 (pl.) < Denkmal の -mal は「印、痕」を意味する名詞 Mal ['ma:l] に関連づけられると考えられる。ただし、この名詞は「ほくろ」を指すのでなければ、それ単体で用いられることは珍しく、たいてい何らかの語によって規定される。その規定語は Muttermal ['mʊtɐ.ma:l] 「母斑」の Mutter 「母」のように名詞のこともあれば、Brandmal ['brant.ma:l] 「焼印」の Brand (< brennen 「燃える、燃やす」) や Merkmal ['merk.ma:l] 「特徴、メルクマール」の merk- (< merken 「察知する」) のように動詞に由来することもある。さらにこの後者には、Brand 「燃えること、火事」のようにそのまま名詞として機能する語もあれば、merk のように動詞の語幹ゆえ、それ単独では名詞として機能しないものもある。つまり、X-mal という構造の語は、外見的に複合語でありながら、その実態は、Muttermal 「母斑」のように真に複合語と言えるものから、Merkmal 「特徴」のような、「察知する」という意味の動詞に由来して「何かを『察知する』道具・手段・契機」を意味する派生語に近いものまで、幅が広い。そしてこの連続性をさらに先へと伸ばすのが Denkmal 「記念碑」である。Merkmal 「特徴」までは、その複数形が名詞 Mal と同じくシュワー語尾 -e によって「ウムラウト」なしで形成されることから (Male ['ma:lə], Muttermale ['...ma:lə], Brandmale ['...ma:lə], Merkmale ['...ma:lə]), なお名詞としての Mal を第 2 構成語とする複合語と分析する十分な根拠があるが、-er 語尾によって複数形を形成する Denkmal に至ってそのような分析は難しい。この -mal はより積極的に派生接尾辞の一種と見なさざるを得ない。とはいえ、いま述べた -er 語尾ゆえに「ウムラウト」を受けるといふ、まさに語幹的な特質のせいで、これを完全な派生接尾辞と見なすのも、なお憚られる。こうして Denkmal の -mal には「複合語の第 2 構成語と境界領域を分かち合う派生接尾辞」という中間的なステータスが認められることになる。

同様の中間的ステータスは、Scheusäler 「化け物」 (pl.) < Scheusal の -sal [za:l] にもあてはまる。この -sal は、共時的に見て語ではなく、動詞から名詞を派生する接尾辞であることが明らかである。例として Mühsal ['my:za:l] 「苦勞、難儀」 (< mühen 「骨を折る」) や Schicksal ['ʃik.za:l] 「運命」 (< schicken 「送る」) の -sal が挙げられるが、これらの派生語はみな、複数形をシュワー語尾 -e で形成し、-sal の母音は「ウムラウト」されない (Mühsale ['my:zä:lə], Schicksale ['ʃik.zä:lə])。これに対して Scheusal は, scheuen 「恐れる」を意味する動詞からの派生語である点こそ、それらと共通するが、Mühsal が『「骨を折った」末の（報われない）結果』として「苦勞」を意味し、Schicksal が「天から人に一方的に『送られる』結果」として「運命」を意味するのとは異なり、「人が何かを『恐れた』結果」ではなく「人を『恐れさせる』原因」としての「化け物」を意味する。こうした、「結果」対「原因」ほど対極的な意味の相違のせいで、Scheusal には、その屈折パラダイムを Mühsal 等のそれと異なるものにする力学が作用する¹⁶。このため Scheusal の複数形は、「ウムラウト」を伴わない -e 語尾ではなく -er 語尾によって「ウムラウト」付きで形成されることとなる。その「ウムラウト」を被るのが、ほかならぬ -sal である。この派生接尾辞は、動詞から名詞を派生する接尾辞であるとともに、あたかも名詞という語のようにも振舞い、そのことで Scheusal という語全体を複合語のようにもしている。つまり、ここにも、Denkmal – Denkmäler 「記念碑」の場合と同じく、派生語の特色と複合語の特色を併せ持たせる作用がはたらいっている¹⁷。こうして、わず

¹⁶ 例えば、動作主名詞化のための -er が過程名詞化に、過程名詞化や結果名詞化のための -ung が動作主名詞化に用いられることがまれに起こるが（例：fahren 「運転する」 > Fahrer 「運転手」 – lachen 「笑う」 > Gelächter 「爆笑」；untersuchen 「調査する」 > Untersuchung 「調査（結果）」 – bedienen 「給仕」 > Bedienung 「給仕（の担い手）」），そうした場合、典型的な派生時には問題のない複数形の形成が強く制限される。

¹⁷ 類例として、3.1 節後半で論じた (13b) Bistum – Bistümer 「司教区」 (sg. – pl.) における -tüm [tu:m] – -tümer [ty:mɐ] のことも思い起こされたい。

かに認められる非強勢位置における長母音の [ɛ:] が、屈折形態論と造語論の相乗効果によるものであり、音声学・音韻論プロパの現象として解決が必要な課題ではないことが明らかとなった。

本小節の成果をまとめると、[ɛ] と [ɛ:] もまた、3.1 ～ 3.2 節で観察した緊張母音や弛緩母音と同じく、非強勢の環境で長・短の差異が音声学的・音韻論的に解消され、短い [ɛ] だけが残る。その際、この母音は、開音節をなすにせよ閉音節をなすにせよ、強勢後位置には原則として現れない。この性質は、すでに見た母音のうち [e] と共通のものである。この事実からは、シュワー [ə] との相補分布の要請(3.1 節参照)が緊張母音の [e] だけでなく弛緩母音の [ɛ] にも及んでいる可能性が窺われる。その反面、強勢前位置に現れる [ɛ] は、開音節と閉音節のいずれもなし得るという点で、3.1 節の緊張母音(非強勢位置ではもっぱら開音節をなす)とも、3.2 節の弛緩母音(もっぱら閉音節をなす)とも異なる結果である。この錯綜した状況をどう整理するかは、4. 節で検討することになる。

3.3.2 [a] と [a:]

[a] は(17)に示すとおり、強勢前・強勢後と閉音節・開音節という2つの選択を組み合わせ得られる環境のすべてで事例が観察される。(17a)が強勢前の閉音節、(17b)が強勢前の開音節、(17c)が強勢後の閉音節、(17d)が強勢後の開音節にそれぞれ現れる例だが、満遍なく分布していると言える。

- (17) a. *ambitiös* [am.bi.'tsjɔ:s] 「野心的な」、*Antenne* [an.'tɛnə] 「アンテナ」、*bankrott* [ban.k.'rɔt] 「破産した」、*hantieren* [han.'ti:rən] 「働く」、*Kartoffel* [kar.'tɔf] 「ジャガイモ」、*randalieren* [ran.da.'li:rən] 「乱暴狼藉をはたらく」、*Appendix* [a'pɛn.dɪks] 「付録」、*Attest* [a'tɛst] 「診断書」、*Bacchanal* [baxa.'na:l] 「バックスの祭り」、*Passant* [pa'sant] 「通行人」、...
- b. *Atom* [a.'to:m] 「原子」、*blämieren* [bla.'mi:rən] 「恥をかかせる」、*fanatisch* [fa.'na:tiʃ] 「狂信的な」、*Kapitel* [ka.'pɪt] 「章」、*Krawatte* [kra.'vaʔə] 「ネクタイ」、*pathetisch* [pa.'te:tiʃ] 「荘重な」、*sanieren* [za.'ni:rən] 「改造する」、*spazieren* [ʃpa.'tsi:rən] 「ぶらつく」、...
- c. *Monat* ['mo:nat] 「(暦の) 月」、*Fiat* ['fi:at] 「同意」、*Baldachin* ['bal.daχi:n] 「天蓋」、...
- d. *Drama* ['dra:ma] 「戯曲」、*Mensa* ['mɛn.za] 「学生食堂」、*Paula* ['paʊ.la] 「パウラ(女性の名)」、*Rosmarin* ['ro:s.ma:ri:n] 「ローズマリー」、*Schemata* ['ʃe:ma.ta] 「図式」(*pl.*)、...

全体を通じて外来語が目立つ。とはいえ、在来語も(17a) *Kartoffel* や(17c) *Monat* のようにまったくないわけではない。また、主要な品詞(名詞、動詞、形容詞)に事例が広く分布し、それぞれの品詞における通常の屈折パターンに収まるものが大半である。さらに、(17)の例示は、複合語と交差する可能性のある(さきほど取り上げた *-tum* や *-sal* やこれに準ずる)派生接辞に関わるものは除いて行っているが、それでもこれだけの事例を挙げることができている。こうした条件を満たす [a] や [a:] がドイツ語の語構成の中心に帰属するものであることは明白である。この母音の特質は、音声学的・音韻論的な観点からも解明されなければならない。

長さや張りの関係への関心に照らして重要なポイントは、閉音節の中でも「きつい切れ方」の可否である。(17a)の *Appendix* [a'pɛn.dɪks] 以下の事例、および(17c)の *Baldachin* ['bal.daχi:n] が、強勢前でも強勢後でも、[a] の下でこの切れ方が起こり得ることを示している。とはいえ、強勢後の事例は — 筆者が探索した限り — (17c) *Baldachin* ['bal.daχi:n] くらいしか見つからなかった。しかも、この語は、[' _ _] だけでなく [_ ' _] と強勢されることも可能で(Mangold³1990: 163)、かつ、その場合は [a] に

続く子音が [x] から [ç] に交替して、「きつい切れ方」には至らないようである¹⁸。この子音交替は、音素 /x/ の異音条件¹⁹ に則った現象であり、[x] が生起する [‘_ _] では、この子音が明らかに [a] による第 2 音節のコーダと直後の [i:] による第 3 音節のオンセットに位置することを示す一方、[‘_ _] に現れる [ç] からは、この子音が第 3 音節のオンセットしか占めていないことが分かる。このことから、[a] は事実上、強勢後位置で「きつい切れ方」をされることがないと見てよいだろう。

[a] を核とする音節が強勢前位置できつく切られた (17a) の事例についても、それが短い弛緩母音 [a] ゆえに引き起こされたものかどうかは疑わしい。当該事例のうち Appendix [aˈpɛn.dɪks] と Attest [aˈtɛst] 「診断書」における「きつい切れ方」では、当該音節が接頭辞 ad- [ad] に由来し、一見したところ、3.2 節や 3.3.1 節で確認した in- [ɪn] や sub- [zʊp], kon- [kɔn], ex- [ɛks] の場合と同様、この接頭辞末尾の子音が後続する子音と同化・一体化している ([ad] + [ˈpɛ...] → [ap] + [ˈpɛ...] → [aˈpɛ...]) かのようと思われる。しかし、ad- は in- や sub- などとは異なり、複合語の第 1 構成語のように振舞い得ない。というのも、ad- 末尾の子音 [d] は有声の阻害音として、いわゆる「語末音硬化 (Auslautverhärtung [独] = final devoicing [英])」のあるドイツ語では語末に生起し得ないからである。また、母音で始まる音節が続けば、[d] が後続音節に帰属する格好で再音節化され、先行音節が開音節となることで「きつい切れ方」を免れ得る (adoptieren [a.dɔp.ˈti:rən] 「養子にする」)。このようなことは in- や sub- 等では起こらない (subatmar [zʊp.at.ˈma:g] 「原子より小さい」, *[zʊpat...], *[zu.pat...])。さらに、(17a) Appendix や Attest における「きつい切れ方」は必須ではなく、[a] が完全な開音節をなす格好で「穏やかな切れ方」になることも許される ([aˈpɛn.dɪks], [aˈtɛst])。この後者の切れ方は、再音節化のため [d] を後続音節に送ることで [dp] や [dt] という不可能なオンセットを引き起こすくらいならば、[d] を完全に落とすほうを優先した結果と捉えられる一方、前者の「きつい切れ方」は、[d] を後続の音節に送り出したあとも、結局 [d] が帰属の決まらぬまま脱落してしまったがために、先行音節にはなおコーダが未解決のまま残っているという意識があり、その埋合せとして当該位置に後続の子音が喰い込んだ結果と考えられる。この「なおコーダが未解決のまま残っているという意識」に寄与するのは、in- や sub- などにも見られた、同一子音字母を重ねて綴る書記法 (Appendix, Attest; cf. illegal, Supplement) である。というのも、ad- の [d] の帰属が後続のオンセットに元来存在する [d] と同化するかたちで円満に解決されれば、音声学的・音韻論的に「穏やかな切れ方」が実現するだけでなく、書記法的にももはや子音字母 d が重綴されなくなるからである (例: Adresse [a.ˈdʁɛsə] < [ad] + [dʁɛ...] 「宛先」; cf. address [英])。

他方、(17a) に挙げた残り 2 つの「きつい切れ方」の事例 Bacchanal [baˌxɑ.ˈna:l] と Passant [paˈʃant] には、ad- のような接頭辞は関与しない。それでも [a] に続く子音 [x] や [s] が両接的であるが、それは、これらの子音が語頭に現れず、語中でも両接的でないオンセットに許されるとすれば、長母音の直後だけだからである (Kuchen [ˈkʉː.xən] 「ケーキ」, Buße [ˈbʉː.sə] 「改悛」)。[baˌxɑ...] や [paˌʃa...] に見られる両接性は、後続子音が原因の不適確性 (*[ba.xa...], *[pa.sa...]) の救済だけに執られる代替措置なのである。

このように見て来ると、[a] に伴う「きつい切れ方」は、他の弛緩母音のように当該母音がコーダに何らかの子音を要請し、この要請が後続音節のオンセット子音に頼ってまで解決されなければならないからではなく、むしろ [a] 自体としては必要としないコーダの位置に、先行音節の形態論 (ad- が元来コーダを有する接頭辞)、ないし後続音節の子音の性質 (短母音直後のオンセットに現れ得ない) といった外在的かつ偶発的な理由のせいで、後続子音が任意または義務的に「関節」化する現象だと捉えられる。その意味で、短い [a] が「きつい切れ方」の引き金ではないのである。

¹⁸ オンライン辞典 Wiktionary の Baldachin の項 <<https://en.wiktionary.org/wiki/Baldachin>> (最終閲覧日: 2025.3.14) にあるオーストリアの音声サンプルは、筆者による判断で [bal.da.ˈçi:n] と発音されている。

¹⁹ /x/ → [x] / ... V [非前舌] _ ...
→ [ç] / その他

続いて [a:] に目をやると、この長母音は — 他の長母音がそうであったように — 非強勢の環境にはあまり現れない。筆者による探索で見つかった限りの代表的な例を挙げれば、(18) のとおりである。閉音節をなすか否かを問わず、(18a) が強勢前、(18b, c) が強勢後の [a:] の事例である。

- (18) a. *Karfreitag* [ka:ʁ.'frai.ta:k] 「聖金曜日」, *tatsächlich* [ta:t.'zɛç.liç] 「実際の、本当に」, *wahrscheinlich* [va:ʁ.'ʃam.liç] 「おそらく」, ...
 b. *Dromedar* ['dro:.me.da:ʁ] 「ヒトコブラクダ」, *lieferbar* ['li:.fɐ.ba:ʁ] 「納品可能な」, *Schicksal* ['ʃik.za:l] 「運命」, ...
 c. *Florian* ['flo:.ria:n] 「フローリアン（男性の名）」, *Grobian* ['gro:.bia:n] 「粗野な人」, *Heimat* ['hai.ma:t] 「故郷」, *heiraten* ['hai.ra:tn̩] 「結婚する」, *Nachbar* ['nax.ba:ʁ] 「隣人」, *ratsam* ['ra:t.za:m] – *ratsamer* ['ra:t.za:.mɐ] (*comp.*) 「勧めるに値する」, ...

(18a) のうち *tatsächlich* [ta:t.'zɛç.liç] と *wahrscheinlich* [va:ʁ.'ʃam.liç] の2つは、それぞれ ['ta:t. zɛç.liç] と ['va:ʁ.ʃam.liç] という、[a:] に強勢を置く発音も可能なので、個別の語彙に条件づけられた例外と見なしてよいだろう。残る1つの *Karfreitag* [ka:ʁ.'frai.ta:k] については、*Freitag* 「金曜日」が *Kar* によって規定された複合語と分析するのが適当と思われる。というのも、この *Kar* には — たとえその語源が、古高ドイツ語の *chara* 「嘆き、悲しみ」という語に遡ること（国松ほか [編] 1985: 1177）を知らずに、純粹に共時的に捉えたとしても — *Kärwoche* ['ka:ʁ.voxə] 「受難週」をはじめとする、典型的に複合語の強勢法（第1構成語に主強勢を置く）によって発せられる一連の関連語との範列的關係を通じて、容易に「キリストの受難に関わる」という語彙的な意味を推し量れる上、複合語の強勢は、第2構成語の類別を目的とする限り、第2構成語に落ちることも一般的に可能（Jacobs 1990: 80f.）だからである。

(18b) では *Dromedar* ['dro:.me.da:ʁ] が、語彙的に条件づけられた例外である。これまで見た同様の他の多くの例のように、この語でも [dro.me.'da:ʁ] という具合に [a:] に強勢を置くことができる（Mangold³ 1990: 257）。他の2語は、複合語と境界を接する派生接尾辞に長さが残る事例であり、ここに挙げた以外にも、多かれ少なかれ類例がある。このうち *Schicksal* ['ʃik.za:l] については、すでに 3.3.1 節で [ɛ:] との関連で論じたのでここでは繰り返さない。他方、*lieferbar* ['li:.fɐ.ba:ʁ] は事情がやや異なる。この例に起こる、強勢を受けずに長い [a:] から成る *-bar* [ba:ʁ] は、動詞の語幹（この例では *liefer-*）に付き、極めて生産的に形容詞を派生する接尾辞である。その際、動詞から生産的に品詞転換を引き起こす他の派生接尾辞 — 代表的なものは、動作主や道具等を意味する名詞を派生する *-er* [ɐ] と過程や結果等を意味する名詞を派生する *-ung* [ʊŋ] — が母音で始まるのとは対照的に、この接尾辞 *-bar* は子音、しかも聞こえの階層でもっとも低い極に位置する閉鎖音の [b] で始まるものである。[b] は一般的に音節のオンセットで他の子音に先立たれることがない。このため *-bar* [ba:ʁ] はどの動詞の語幹に接しても、再音節化の影響を被らず、動詞語幹とこの接尾辞との境界が常に音節境界であり続ける。しかも、動詞語幹は語彙次第でシュワーに終わり（例えば、この例の *liefer-* ['li:.fɐ]）、また、接尾辞 *-bar* 自身も屈折による格変化語尾の追加によって（例えば、単数・中性・主格であれば *-bares* [ba:.rəs] となる）、各々がトロカイオス（強弱）の韻脚をなし得る。こうして、双方とも「音韻論的な語」（morphological word）であることが担保される。接尾辞 *-bar* から成る語は、動詞から派生された形容詞という機能的な観点でこそ派生語だが、音声学的・音韻論的には複合語に該当するのである。すると、その第2構成語としての *-bar* の核母音 [a:] が副強勢を受けて長さを保つ ([li:.fɐ].ə[ba:.rəs]) のは、何ら不思議なことではない。別の言い方をすれば、この母音の長さを単成語の強勢（主強勢）後の位置に起こるものと同列に捉える必要はないのである。

これに対して (18c) で強勢後に現れる [a:] は、音声学的・音韻論的な記述対象であると考えられる。

その根拠は事例によって一様ではないので、以下、順に説明していく。

まず, Nachbar ['nax.bə:g] は、いま述べた派生接尾辞と同一の音連鎖 -bar を含んでいるが、この語が形容詞ではなく名詞であることから、当該の -bar はさきほどの -bar のような接尾辞ではなく、語幹の一部である。この名詞は「男性弱変化」と呼ばれる屈折クラスに属するが、ここに挙げた単数・主格形 Nachbar ['nax.bə:g] が音節的なシュワー -e [ə] で終わっているわけでもないのに、この語は屈折の際、単数・主格以外のすべての語形に追加される語尾が、音節的な -en [ən/n̩] ではなく、非音節的な -n [n] となる。ここには、当該の [a:] がたまたま単成語の語幹内にも現れ得るという以上の示唆が含まれているように思われる。すなわち、この長い [a:] は、強勢を伴わずに語幹内に生起することで、音節的なシュワー語尾の語幹内部への侵入防止に貢献しているのである。さらに, Heimat ['haɪ.ma:t] と heiraten ['haɪ.ra:tɪn] も、[a:] を語幹の一部としている。これらによって、男性弱変化でない名詞や動詞にも、いま男性弱変化名詞について述べたのと同じ効果がもたらされている。こうして、かつての「ウムラウト」の仕組みが機能しなくなった現代のドイツ語でも、語幹と語尾の区別はなお相当程度、音声学的・音韻論的に維持されている。この基盤があってこそ、語尾が示す屈折的・語彙的クラスに応じて、屈折や派生のさまざまな過程を幹母音の交替によって表現する今日的な「ウムラウト」が機能するのである。

(18c) の残りの例では、[a:] が派生接尾辞、ないし、それと（負の）関連性を有する要素の核母音となっている。ratsam ['ra:t.za:m]–ratsamer ['ra:t.za:m̩] の -sam [za:m] は、さまざまな品詞から形容詞を派生する接尾辞だが、その派生過程は（もはや）生産的ではない。音節のオンセットで他のいかなる子音にも先行されない子音 [z] で始まる点でさきほど (18b) で見た -bar と共通するにもかかわらず、この -sam は音節的なシュワーで終わる語幹には後接せず、常に自身の直前の音節に強勢を置くため、先の -bar に見られた複合語的な構造を音声学的・音韻論的レベルで生み出さない。しかし、それだけに、この -sam の [a:] を -bar の [a:] のように音声学的・音韻論的な記述の対象から除くことはできない。同じことは、Grobian ['gro:bj̥a:n] の -ian [j̥a:n] にもあてはまる。形容詞などから「当該形容詞の性質を持った人物」という意味の名詞を派生するこの接尾辞もまた、生産性の低いものだが、この接尾辞はそもそもまっとうな子音（聞こえ度の階層において低い障害音）で始まっておらず、音韻論的に複合語の第2構成語と分析することができない²⁰。このような -ian に現れる [a:] は、-sam に現れるそれと同じく逆説的な意味において、音声学・音韻論の対象なのである。

最後に残ったのは Florian ['flo:ri̯a:n] だが、ここにもいま論じた Grobian の -ian と同一の音連鎖がある。もっとも、Florian の -ian (= -ian^[A]) は Globian の -ian (= -ian^[B]) とは似て非なる表現でもある。第一に、-ian^[B] が形容詞等から名詞を派生する接尾辞だったのに対し、-ian^[A] は固有名詞の一部である。第二に、-ian^[B] の生産性は低く、それによる派生語の使用頻度も高くないと思われるのに対し、-ian^[A] に終わる人名はタイプが比較的多い上（例：Adrian ['a:dr̥i̯a:n], Fabian ['fa:b̥i̯a:n], Kilian ['ki:l̥i̯a:n], Maximilian [maks̥i.'mi:l̥i̯a:n], ...), トークンとしてもしばしば耳にするポピュラーな名前である。第三に、-ian^[B] による派生名詞は指示表現として軽蔑的なものであり、それゆえ、形容詞の中でも人の性質を表し得るものからしか作られない（例：Dummian ['d̥om̥i̯a:n] 「まぬけ」 < dumm ['d̥om̥] 「馬鹿な」、Liedrian ['li:dr̥i̯a:n] 「だらしない奴」 < licherlich ['li:de.l̥iç] 「だらしない」）。これに対して -ian^[A] で終わる名前にはそのような軽蔑化の効果はない。このように中立的な -ian^[A] は、動植物の名称にも現れる（例：Pavian ['pa:v̥i̯a:n] 「ヒヒ」、Durian ['du:ri̯a:n] 「ドリアン（果実）」、Enzian ['en:ts̥i̯a:n] 「リンドウ」、Tymian ['ty:m̥i̯a:n] 「タイ

²⁰ -jan [ja:n] を -ian と同一の接尾辞（の異形態）と見るなら、当該派生語は, Alberjane [ω['al.b̥e].ω[ja:n̩]] 「お人よし」(pl.) (< albern ['al.b̥en] 「子供じみた」) や Liederjane [ω['li:de].ω[ja:n̩]] 「だらしない奴」(pl.) (< licherlich ['li:de.l̥iç] 「だらしない」) のように、音韻論的な複合語として分析できる可能性もある。ただし、ここでは第1構成語の一部 (albern の -n [n], licherlich の -lich [liç]) が脱落してしまっている。

ム（香草）」）。これほどまでに対照的な2つの機能が同一の音連鎖で表現される状況は、これまで繰り返し述べてきたドイツ語主母音の性格に照らして理解されるだろう。主母音はシュワー [ə] と機能的に対立するものとして優先的に語幹に現れる。このため、主母音である [a:] を核とする音節がたとえ接尾辞となることがあっても、(18b) *lieferbar* の -bar のような複合語との境界現象でない限り、その機能は限定的ないし特殊なものに留まる。これに対して [a:] が、固有名詞のような、派生過程を問題にしない表現に現れれば、語幹の中に浸透しては目立つ存在ではなくなり、特段の効果も発揮しないのである。

本小節の結果をまとめると、[a] は、強勢前と強勢後のどちらの位置にも現れ得る。この点で、この短母音は、他の短く実現される緊張母音の一部 ([i], [u], [o]) や弛緩母音の一部 ([ɪ], [ʊ], [ɔ]) と共通の振舞いを見せるが、これらいずれの母音とも異なり、当該の環境で開音節も閉音節もなし得る。ただし、両接的に子音が後続する「きつい切れ方」の閉音節は、強勢後には事実上見られず、また、強勢前位置でも [a] に起因する現象ではない。さらに、長い [a:] も、強勢後に限られるとはいえ、非強勢位置に可能である。この「非強勢位置で」長く実現されるという性質は、他の母音には — 特別な語彙的・形態論的条件がある場合を除いて — 見られなかったものだけに、理論的に極めて重要な意味を持つ。あわせて、この位置に現れる長い [a:] が同じ環境の短い [a] と同様、開音節と閉音節のいずれをもなし得ることが特筆される。

4. 長さか張りかの二者択一的一元論からの脱却

3.1 ～ 3.3 節で観察したドイツ語主母音の非強勢位置における音節的振舞いはどのように整理されるだろうか？ 長さか張りかという問題提起の発端は、先行研究でも本稿でも、母音の種別が開音節・閉音節の別と密接に関係することにあつたが、この点を、先行研究で顧みられなかった非強勢位置にまで広げて調査した本稿では、各々の母音が開音節・閉音節のいずれを（も）なすのか、という観点がなおさら重要である。この観点から、3. 節の調査結果を強勢位置での状況と比較しつつ考察すれば、表3（次頁）のようにまとめるのが妥当だと考えられる²¹。この表において (i) ～ (iii) は、3. 節で観察のためひとまず便宜的に採用した分類に則っているが、この分類では、すべての緊張母音が (i) に含まれていた一方、弛緩母音は [ɛ] と [ɛ:], および [a] と [a:] が (iii) に、その他はすべて (ii) に属していた。他方、表3は短い [ɛ] を、3. 節では一括して観察していたにもかかわらず、(iii a) と (iii b) の2種類に区別している。以下では、その根拠も含めて (i) ～ (iii) の順に筆者の分析を紹介し、最終的には新たな音素体系を提案することにする。

4.1 (i) の緊張母音と (ii) の弛緩母音

(i) の緊張母音と (ii) の弛緩母音は、非強勢位置に現れると、強勢位置で見られた長・短の差異が短いほうに中和される。また、(i) と (ii) はともに、その分布に鑑みて、強勢前・後の両方に現れる a. グループと強勢前にしか現れない b. グループとに下位区分され、しかも a.・b. 各グループの特徴 — a. は円唇前舌母音を除く狭母音または半狭の非円唇後舌母音, b. は円唇前舌母音または半狭の非円唇前舌 — は (i) (ii) を通じて共通である。こうした共通性の下、(i) と (ii) で対照的なのが音節的振舞いである。(ii) の弛緩母音が a.・b. とも、強勢位置にあつたときと変わらず閉音節にしか現れないのに対し、強勢位置で閉音節にも現れ得た (i) の緊張母音は、a.・b. の両方を通じて、非強勢位置では閉音節に現

²¹ 表3をまとめるにあたり、3. 節でもっぱら歴史的・形態論的な事情によって強勢前ないし強勢後の環境に生起すると認定された主母音の事例 ((13a, b), (15b), (16), (18a, b) など) は除外してある。

表 3 ドイツ語主母音の強勢位置・非強勢位置の条件に鑑みた音節的振舞い

	強勢前位置 (例)	強勢位置	強勢後位置 (例)
(i) a. [i(:)], [u(:)], [o(:)]	短：＋開・－閉 (12a)	長：＋開・＋閉	短：＋開・－閉 (12b)
b. [e(:)], [y(:)], [ø(:)]	短：＋開・－閉 (12a)	長：＋開・＋閉	
(ii) a. [ɪ], [ʊ], [ɔ]	短：－開・＋閉 (14a)	短：－開・＋閉	短：－開・＋閉 (14b)
b. [ʏ], [œ]	短：－開・＋閉 (14a)	短：－開・＋閉	
(iii) a. [ɛ]	短：－開・＋閉 (15a)	短：－開・＋閉	
b. [ɛ(:)]	短：＋開・－閉 (15c)	長：＋開・＋閉	
c. [a]	短：＋開・＋閉 (17a, b)	短：－開・＋閉	短：＋開・＋閉 (17c, d)
d. [a:]		長：＋開・＋閉	長：＋開・＋閉 (18c)

れず、開音節しかなさない。さらに、表 3 (i) からは、緊張母音が閉音節をなし得るにしても、それは当該母音が長く実現される強勢位置に限られるということも分かる。裏を返せば、緊張母音は強勢を受けずに短く留まる限り、開音節しかなさないのである。これとは対照的に (ii) の弛緩母音が閉音節しかなさないのは、強勢・非強勢の如何に関わらず一貫している。このことから、(i) と (ii) の関係は、依然として「緊張」ではなく「弛緩」を正の特徴として捉えるのが妥当であると言える。つまり、(i) と (ii) のあいだには強勢位置・非強勢位置を通じて、「弛緩」という正の特徴を有する (ii) が、この性質を欠く (i) に対して有標であるような欠如的対立関係が成り立つ。その際、「弛緩」ゆえに有標である一連の母音は、長さが制限され、強勢を受けても短く留まる一方、「弛緩」という特徴を示さない無標の母音は、強勢を受ければ（そして、その場合に限り）長く、かつ開音節も閉音節もなし得るのである。

こうして、長さとし張りのうち張りのほうがより本質的な差異であり、長さのほうは、「弛緩」を欠くという意味での無標の緊張母音が強勢を受けることで得られる副産物である、という分析が示される。以上をまとめ、さらなる弁別的特徴を補って音素体系を整理すれば (19) のとおりである。

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| (19) a. /i/: [狭]・[前舌] | g. /e/: [半狭]・[前舌] |
| b. /u/: [狭]・[非前舌] | h. /o/: [半狭]・[非前舌] |
| c. /y/: [狭]・[前舌]・ [円唇] | i. /ø/: [半狭]・[前舌]・ [円唇] |
| d. /ɪ/: [狭]・[前舌]・ [弛緩] | |
| e. /ʊ/: [狭]・[非前舌]・[弛緩] | k. /ɔ/: [半狭]・[非前舌]・[弛緩] |
| f. /ʏ/: [狭]・[前舌]・ [弛緩]・[円唇] | l. /œ/: [半狭]・[前舌]・ [弛緩]・[円唇] |

(19d-f) と (19k-l) は、音声学的にはそれぞれ [ɪ]–[ʊ]–[ʏ] と [ɔ]–[œ] で表示される音によって実現されるが、音韻論的にはそれぞれ (19a–c), (19h–i) とのあいだで「弛緩」の有無によって欠如的に対立していることを捉えやすくするため、各緊張母音の字母に補助記号 ˇ を付けて表示してある。また、緊張母音の長さは強勢に依存し、非弁別的であるため、長音符 : は省いてある。(19) で目を引くのは (19j) の空白である。(19) は全体として、2. 節で検討した先行研究タイプ 2 と根本的に同じ発想を示しているが、そこで想定されていた「半狭」「前舌」の緊張母音 (19g) に対する弛緩母音の席がひとまず空いた状態である。ここが本当に空白なのかどうかは、次節で [ɛ] の扱いを論ずる中で明らかになる。

4.2 (iii) の弛緩母音

(iii) の弛緩母音のうち c. の短い [a] と d. の長い [a:] には、緊張・弛緩を軸にした分析がもはや妥当でないことが明白である。[a] は他の強勢位置で短く留まる弛緩母音の (ii) と異なり、非強勢位置に

表 3' ドイツ語主母音（半広～広）の強勢位置・非強勢位置の条件に鑑みた音節的振舞い（比較のための対案）

	強勢前位置 (例)	強勢位置	強勢後位置 (例)
(iii) a. [ɛ]	短：＋開・＋閉 (15a, c)	短：－開・＋閉	
b. [ɛ:]		長：＋開・＋閉	
c. [a]	短：＋開・＋閉 (17a, b)	短：－開・＋閉	短：＋開・＋閉 (17c, d)
d. [a:]		長：＋開・＋閉	長：＋開・＋閉 (18c)

現れるときは — 強勢前でも、強勢後でも — 開音節をなし得る。[a:] も、強勢後の非強勢位置でも長いという点で、強勢位置のみで長く実現される緊張母音 (i) とは振舞いが異なる。両者を「弛緩」の有無によって欠如的に対立させることは適当でない。むしろ、この2つの母音は、どの環境に現れても各々の長さ・短さを維持するのだから、それぞれが「長」と「短」の特徴を有して対立する「等値的対立 (äquipollente Opposition ; Trubetzkoy⁷1989 [1939]: 67)」の関係にあると分析すべきである。[a] または [a:] の一方が「長」または「短」を正の特徴として有し、この特徴を欠く他方と欠如的に対立している、としないのは、それだと、強勢位置で閉音節しかなさない [a] がよりによって非強勢位置で開音節をなし得ることを説明できないからである。[a:] と [a] は、その両方が内在的に長さの特徴を有しており、[a:] はその属性として常に「長」だからこそ、強勢後の非強勢位置に長いまま残れるのだし、[a] はその属性として常に「短」だからこそ、非強勢位置では非強勢に見合うだけの量的要請（短さ）さえ果たされれば、閉音節をなさねばならない道理はなく、開音節をなしても構わないのである。この点で [a:] と [a] の対立様式は、「弛緩」の特徴を有する (ii) の弛緩母音に、この特徴を欠く (i) の緊張母音が対立するような欠如の様式ではなく、「長」と「短」とが対等に対立する等値的なものなのである。

残るは [ɛ] と [ɛ:] だが、3.3 節の調査結果をそのまま表にすれば、表 3 (iii) の部分は元来、表 3' のようにまとめられそうなものである。すなわち、[ɛ] と [ɛ:] の対立は長さの対立として分析される余地がある。その場合、当該の長さによる対立の様式が [a] と [a:] のそれに準じて等値的だとすれば、常に「短」である [ɛ] は [a] と同様、強勢位置ではそのような音節に見合うだけの量を示さなければならず、コーダに子音を伴うことが不可欠なため、この環境に限って閉音節の形成を義務づけられる一方、非強勢（強勢前）の環境に現れる限りは開音節をなしても構わない、と説明することができる。これは確かにシナリオとしては首尾一貫したものである。

しかしこのシナリオでは、開音節・閉音節の分布に関するある重要なポイントを見誤ってしまう。仮に [ɛ] が [a] と同じく絶えず「短」であるがゆえに、強勢前位置において閉音節だけでなく開音節も随意になし得るのだとすれば、この環境に「きつい切れ方」は原則として起こらないはずである。この予測は、現に 3.3.2 節 (17a, c) で確かめたとおり [a] には妥当する。[a] 自体は強勢前位置にも強勢後位置にも現れるが、両接的な子音が後続するのは強勢前に限られ、しかもこの位置における両接的な子音は、任意に実現されるか（例：Appendix [a'pɛn.dɪks] / [a.'pɛn.dɪks], Attest [a'tɛst] / [a.'tɛst]）、義務的な場合（例：Bacchanal [baxa.'na:l], Passant [pa'sant]）でも後続の子音が原因で発生する現象であって、[a] が原因で引き起こされるのではなかった。これに対して 3.3.1 節 (15a) で例示した [ɛ] の場合、強勢前位置でこの母音に後続する子音が両接的になるとき、この両接性は必須である (Effekt [ɛ'fɛkt] / *[ɛ.'fɛkt], Ellipse [ɛ'lip.sə] / *[ɛ.'lip.sə], Terrorist [tɛro.'rɪst] / *[tɛ.ro.'rɪst])。とりわけ ex- に由来する事例については、この接頭辞の異形態には後続子音を伴わない [ɛ] も可能で、その場合は「穏やかな切れ方」も許される（例：evident [ɛ.vi.'dɛnt]）にもかかわらず、件の両接性の事例における [ɛ] はこのような [ɛ] にも交替しないのである (*[ɛ.'fɛkt], *[ɛ.'lip.sə])。

他方、[ɛ] が強勢前位置で開音節をなして穏やかに切れる (15c) のような事例の中には [ɛ] が [e] に任意に取って代わられるものが散見される（例：trainieren [trɛ.'ni:rən] / [trɛ.'ni:rən]）。さらに、ここでの

[ɛ] は、派生の過程で強勢を受けることで長い [e:] として実現されることもあり（例：Trainer ['trɛ:nɐ] 「トレーナー，監督」 <trainieren [trɛ:'ni:rən]; Präfix ['prɛ:fiks] 「接頭辞」 > präfigieren [prɛ.fi:'gi:rən]），その場合の長さは必須である．というのも，この [e:] は，派生関係の中で短い [e] が容認される語であれば，同じく長い [e:] には換わり得るものの (Trainer ['trɛ:nɐ])，短い [e] や [ɛ] に単純に置き換わることはない (Trainer *['trɛ:nɐ] / *['trɛ:nɐ]; Präfix *['prɛ:fiks] / *['prɛ:fiks]) からである．仮に [e:] が [ɛ] に取って代わられれば，その短い [ɛ] が強勢を放棄することで同じ語が保たれる事例が辛うじて存在するものの（例：Präfix [prɛ:'fiks]），そうでなければ，[ɛ] が後続子音の両接性を引き起こし，元来の語と最小対をなす別の語を生み出す結果（例：Trenner ['trɛnɐ] 「分け隔てる人・物，仕切り」）にさえなり得る．

以上の言語的事実から，[ɛ]–[e:] の関係は [a]–[a:] のそれのように長さによって弁別されるものではないと断定される．[ɛ] は内在的に短いがゆえに強勢位置に限ってコーダ子音を必要とする，という先のシナリオは，非強勢位置で引き起こされる「きつい切れ方」によって反駁されるとともに，開音節をなす非強勢の [e] が，強勢を受けると必ず閉音節になる [ɛ] と強勢を受けて長くなる [e:] のいずれとも交替する関係になく，唯一 [e:] に対する弱母音としてのみ捉えられ得るからである．こうして，非強勢位置に現れる短い [ɛ] には，強勢位置で短く閉音節しかなさない [ɛ] に連なる表 3 の (iii a) と，同じ位置で長く開音節もなし得る [e:] に連なる (iii b) という 2 種類が存在することが明らかとなった．

このうち (iii a) は，4.1 節で見た緊張母音に対する弛緩母音とまったく同じ関係で捉えられる．つまり，[弛緩] という正の特徴を有する音素 /ɛ/ が，先の (19) 中の j の位置を占め，この特徴が欠如する (19g) の /e/ と欠如的な対立をなす．

- (19) g. /e/: [半狭]・[前舌]
j. /ɛ/: [半狭]・[前舌]・[弛緩]

他方，(iii b) は，強勢を受ければ長くなり，開音節をなし得ることから，(19d–f, j–l) の [弛緩] 母音のように扱えないことは明白である．[e:] または [ɛ] の強勢・非強勢に応じた分布と長さ，音節的振舞いに鑑みれば，Eisenberg (*2006) が提案したように (2.2.1 節参照)，これを「緊張母音」と見なすほうがまだ適切なように思われる．しかし，そのような分析は，調音音声学的対応を無視したものであるだけでなく，立論方法においても問題が発生する．というのも，仮にこれが緊張母音だとすれば，この母音と [e:] との差異は開口度だけとなり，両母音を互いに異なる音素の実現と捉えて記述するために可能な弁別の特徴の候補は [半狭] と [半広] に絞られることになる．このうち [半狭] は，一連の緊張母音 [e(:)]–[o(:)]–[ø(:)] を別の一連の緊張母音 [i(:)]–[y(:)]–[u(:)] から弁別するために，[狭] との対で必要とされる可能性がある．「可能性がある」と婉曲的に述べたのは，同じ区別は [高舌] に対する [中央舌] でも達し得るからである．他方，[半広] が該当し得る母音は，[e(:)] を除けば，常に短い [ɛ] および [ɔ] と [œ] の 3 つで，これらはいずれも弛緩母音である．この一連の弛緩母音は，先述のとおり，[半狭] の緊張母音 [e(:)]–[o(:)]–[ø(:)] と欠如的に対立する (= [弛緩] という正の特徴を有することによって弁別される関係にある)．そのため，(19j–l) のとおり [弛緩] 以外の弁別の特徴は両母音列で共通する．つまり，[e(:)] 以外の半広母音はみな，音素のレベルでは [半広] ではなく [半狭] で特徴づけられる．ただし，この [半狭] についても，その代わりに [中央舌] で用を足せる．こうした中，[e(:)] を [e(:)] と [ɛ] と異なる音素に由来するとして，この音素を他の 2 者 — [半狭]・[前舌] の /e/ と [半狭]・[前舌]・[弛緩] の /ɛ/ — から区別して特徴づけるには，[半広] を採用し，[半広]・[前舌] とせざるを得ない．しかし，この [半広] の選択は，まさにこのひとつの音素を特徴づけるために導入したかたちで，高舌・中央舌・低舌の 3 分類ではなく，狭・半狭・半広・広の 4 分類が適切であるとする独立的な根拠が示されないままとなる．つまり，[e(:)] などの緊張母音と分布条件（強勢（前）位置に分布），

長さ（強勢位置で長い）、音節的振舞い（開音節の可能性）が同一だという 1 点だけに固執して、調音音声学的に弛緩母音である [ɛ(:)] を音韻論的に緊張母音に分類しても、結局はトートロジーに終わってしまうのである。

では、どうしたらよいのか。[ɛ(:)] をいかなる意味でも緊張母音と見なすことなく音素体系に組み込みつつ、その強勢・非強勢に依存しない開音節の可能性と強勢位置における長さとを導き出すには、同じく調音音声学的に弛緩母音ながら開音節が可能、かつ長くもなり得る広母音 [a]–[a:] との下位体系性に遡求するのがよい。もっとも、[a]–[a:] との差異化のために [広] に対する [半広] をいずれにせよ参照せざるを得ないが、この特徴に留まるだけでは、やはり元の本阿弥である。というのも、[a]–[a:] には、[i(:)] や [e(:)] との区別のために [広] を必要とする可能性があるものの、同じ目的は [低舌] でも達せられるため、依然、[ɛ(:)] を音素化するためだけに [半広] を設定した、との誹りを受けかねないからである。開口度以外にも必要かつ十分な範囲で別の特徴づけが求められる。

この方向で、[ɛ(:)] と [a]–[a:] とのあいだで顕著な差異は、[前舌] 対 [非前舌] である。この差異の音韻論的関与性は、異音関係にある [x] と [ç] の分布（注 19 参照）によって独立的に根拠づけられ、[ɛ(:)] は [前舌]、しかし [a]–[a:] は [非前舌] である（例：Gespräch [gə'ʃprɛ:ç] 「会話」；Dach ['dax] 「屋根」，sprach ['ʃpra:x] 「話す」(1.sg.past)）。

そしてさらに、[長]・[短] も挙げられる。さきほど説明したとおり、この 2 つの特徴は、（おそらく本稿の観察によつてはじめて明確にされた）強勢の如何によらず一貫して長い [a:] と、一貫して短い [a] という対立を記述するのに不可欠な道具立てである。[a:] と [a] は、双方がそれぞれ [長] と [短] の特徴を有して対立するわけだが、この対立に [ɛ(:)] が加わるのである。その際、[ɛ(:)] の長さは、(i) の緊張母音と同様に強勢次第であることから、音素レベルでは中立的 — つまり、[長] の特徴も [短] の特徴も備えていない — とするのが妥当である。こうして、[半広] ～ [広] の領域で等値的に対立する 3 つの音素が (20) のように特徴づけられる。

(20) a. /a/: [広]・[非前舌]・[短]

c. /ɛ/: [半広]・[前舌]

b. /a:/: [広]・[非前舌]・[長]

強勢の有無によらず一貫して長く実現される (20b) では、この音素が伴う [長] が可視的になるよう、敢えて長音符 : を付けてある一方、(20c) の長さは強勢に依存して実現されるので同じ符号を付けていない。他方、音声学的に半広の前舌弛緩母音を (19j) のとおり [半狭] の音素とし、/ɛ/ で表示することにしたため、従来、半広の前舌弛緩母音の表示に用いていた字母 ε を [弛緩] という正の特徴を欠く [半広] の音素 (20c) に充て、/ɛ/ と表示することが可能になった。

ここで理論的に重要なこととして、これら 3 つの母音は、音声学的には弛緩母音だが、半広～広の環境にそもそも緊張母音が存在しないため、[弛緩] という弁別特徴を持たない。この状況は、[m] や [n]、[l] や [r] などの共鳴音が音声学的に有声音ながら、阻害音のように対立する無声音の相手を持たないため、音韻論的には [有聲] という弁別特徴を欠くのと同じである。この意味で [有聲] 音でない共鳴音が — 「あたかも無声の阻害音であるかのように」 — 「語末音硬化」を被る音節コードにも現れる (Scham ['ʃa:m] 「恥じらい」，Huhn ['hu:n] 「鶏」，Mehl ['me:l] 「小麦粉」，dürr ['dyr] 「干からびた」) ように、音素としては [弛緩] 母音でない /ɛ/ も — 「あたかも緊張母音であるかのように」 — 開音節に現れ、強勢を受ければ長くもなるのである。

あわせて、(20c) が [半広] で特徴づけられるとともに、[弛緩] も [緊張] も伴わないことで、経験的なメリットにも与える。この音素を (19g) /ɛ/ や (19j) /ɛ/ と比べると、[弛緩] の有無以外で決定的な差異は [半広] か [半狭] かだけである。この開口度の差異は高舌・中央舌・低舌の 3 分類では捉え

られないものだが、当該の対立は欠如的でも等值的でもなく、「漸次的な対立 (graduelle Opposition ; Trubetzkoy 1989 [1939]: 67)」, つまりは程度の問題である。程度の問題だけに、話し手や変種によっては、「程度の差」が有効でないことがあっても不思議ではない。現に、標準的な変種で *Ehre* ['ɛ:rə] 「名誉」-*Ähre* ['ɛ:rə] 「穂」や *gebe* ['ge:bə]-*gäbe* ['gɛ:bə] 「与える」 (*subj.pres.*-*subj.past.*) のような語彙的・文法的表現に見られる [ɛ:] と [ɛ] の最小対は、多くのドイツ語話者にとって存在しない (Eisenberg 2006: 92)。このように脆い区別を微細な程度の問題として説明できるという点で、[半狭] に対する [半広] に鑑みた差異化は好都合と言える。

こうした経験的メリットの一方、ここには理論的な弱みもなくはない。ひとつは、標準的な体系を説明するのに狭～広の 4 分類が必要ということ、[ɛ:] と [ɛ] の差異が存在しない非標準的な変種の記述・説明には、高舌・中央舌・低舌の 3 分類で十分ということにもなる。しかし、標準的か非標準的かに応じて 4 分類と 3 分類を使い分けるような説明方法は、4 分類への精緻化の過程が体系内的に明らかにされない限り、実態として連続的である標準変種と非標準変種の間を、結局のところ、4 分類か 3 分類かの二者択一の問題に矮小化することになりかねない。加えて、張りの対立があるかどうかは、根本的に程度の問題ではなく、両極的に条件づけられた現象だということもある。この対立が見られるのは開口度の低い方の極（狭ないし高舌）であり、高いほうの極（広ないし低舌）には見られない。この不可逆的な原則は、[ɛ:] の長さの問題を上述の音素構造によって解決しようとするのであれば、基盤となるものである。それだけに、/ɛ/ の [半広] が、いまやこの音素を主張するためだけに導入されたものでないとはいえ、事実上、この音素にしかあてはまらない特徴であるだけに、他の非漸次的な要因と有機的に関連づけられるのが望ましい。

この関心の下、[弛緩] をめぐる欠如的対立が見られる (19) と見られない (20) をあらためて比べると、この 2 つの下位体系が開口度の差異だけで条件づけられているのでないことが分かる。[弛緩] が関与的な (19) には [円唇] をめぐる欠如的対立も見られる。これに対して、[弛緩] が関与しない (20) には円唇性の差異も存在しない。また、周知のとおり円唇性は一般的に（つまり、通言語的な参照枠である基本母音において）、舌の前後位置と相関し、前舌母音より後舌母音のほうに優先的に現れる一方、広母音には円唇性の優先はあてはまらない。標準的なドイツ語に問題を限っても、狭～半狭の環境において、舌の前後位置は二值的に区別され（＝前舌か非前舌かのどちらかで、両者の中間が許されず）、後舌母音のデフォルトである円唇性が弁別の特徴として機能することで、極めて有標の円唇前舌母音、いわゆる「ウムラウト」が体系的に存在することになっていた。これに対して、広の環境には [a] と [a:] の中舌母音しかなく、後舌母音が存在しないため、円唇という特徴自体があり得ず、したがって「ウムラウト」も成立する余地がない。

それでも、[a]-[a:] は — さきほど [x]/[ç] の異音分布との関連で言及したとおり — 後舌母音の [u] や [o] とともに [非前舌] の自然類をなす。これを支えるのは、狭でも広でもない前舌の母音 [ɛ] と [ɛ:] である。この母音は、まさにこの「狭でも広でもない」中間的な位置づけゆえ、円唇性が機能する狭の環境にも、それが機能しない広の環境にも、いずれにも潜在的に接近し得る。現に標準的な体系に目をやれば、短い [ɛ] は、[弛緩] で特徴づけられる音素 /ɛ/ を具現する母音として、狭母音に準じて振舞うようになっている。しかし、これだけでは、短い [a] と舌の前後の点で対をなす母音が音素レベルで欠け、/a/ の [非前舌] 性が脅かされかねない。しかし、この潜在的な危険は、条件次第で長くも短くもなり得る [前舌] の /ɛ/ によって回避される。この場合、/ɛ/ を構成する弁別の特徴のうち、/a/ や /a:/ との関係で重要なのは [前舌] であって、[半広] のほうは、弁別の特徴として [弛緩] を欠くがゆえに [狭] や [半狭] に接近しなかった結果として残ったに過ぎない。こうした経緯によって主母音体系に位置づけられる /ɛ/ は、確かにその機能性が限定的ではあるが、その分、/a/ や /a:/ の「ウムラウト」という、ドイツ語の語彙的・文法的体系の維持にとって際立って重要なポジションを占めるのである。

表 4 現代ドイツ語（標準的な変種）における主母音の音素体系

		[前舌]		[非前舌]		
			[弛緩]			
[狭]	/i/	/ĩ/	—			[円唇]
	/y/	/ỹ/	/ũ/		/u/	
[半狭]	/e/	/ẽ/	—			[円唇]
	/ø/	/ø̃/	/ö/		/o/	
[半広]	—	/ɛ/	—			
[広]	—		/a/	/a:/	—	
			[短]	[長]		

5. むすび

本稿では、現代のドイツ語の主母音に見られる長さや張りの競合関係について、どちらの差異がより本質的かという、ドイツ語音声学・音韻論で永く議論されて来た問題をあらためて取り上げた。まず、2. 節で、先行研究を批判的に検討した。その結果、どちらの差異をより本質的と見ても、理論的ないし経験的な弱点が残る、差異の一方の次元を他方の次元に全面的に還元しようとする試みはいずれも成功しないこと、その背景には、非強勢にも現れ得る主母音を事実上、強勢位置に現れる場合に限って論じていたという方法論的な不備があったことを指摘した。

この総括を踏まえ、3. 節では、非強勢位置に現れる主母音の音節的振舞いを観察した。その結果、緊張母音、および [e] – [e:] と [a] – [a:] を除く弛緩母音については、非強勢位置でも、強勢位置のときと同様、弛緩母音が閉音節にしか現れず、開音節をなし得るのが緊張母音に限られること、ただし、緊張母音は、強勢位置に現れるときのように長くないことが確かめられた。他方、[ɛ] – [ɛ:] について確認されたのは、[ɛ] は閉音節をなす限り、その分布や振舞いが上述の弛緩母音と共通する一方、開音節をなすや、緊張母音と共通の振舞いを見せることになること、[ɛ:] が非強勢位置に現れ得ないことである。さらに、[a] – [a:] については、いずれも非強勢位置において開音節も閉音節もなすが、[a:] の生起が強勢後に限られるのに対し、[a] は強勢前にも現れ得ることが判明した。

4. 節では、長さや張りの一方を他方に還元しようとする従来の一元論に代わって、双方の次元が一定の条件下で棲み分けながら共存する二元論的な音素体系を、3. 節の観察結果を参照しながら経験的かつ理論的に根拠づけ、新たな音素体系を提示した。その体系は、母音は舌の前後位置と円唇性との相関的な対立の有無の帰結として、狭～半狭と半広～広という2つの領域を占める下位体系から成るものであり、前者の下位体系では[弛緩]による欠如的対立が、後者のそれでは[長]と[短]による等値的対立が成立する。これを図示すれば、表4のとおりとなる。

以上の観察と考察の過程で、今日のドイツ語の音韻体系の諸特性が、歴史的な「ウムラウト」の崩壊とそれに伴う円唇前舌母音の音素化に端を発するものであることが、随所で明らかとなった。あわせて、音声学・音韻論と屈折形態論・派生形態論・造語論（複合語論）との相互作用やドイツ語の（下位）変種の問題、「モーラ型言語」と「音節型言語」という類型論的対立の問題なども、重要な論点として浮かび上がったものの、紙幅が尽きた。これらについては、機会をあらためて論じたいと思う。

付記

本稿は、筆者が JSPS 科研費研究課題「CEFR-J 準拠多言語教育統合環境の構築と実践」(基盤研究 (A) JP 22H00076, 研究代表者: 東京外国語大学・投野由紀夫) の助成を得て日本独文学会 2024 年度秋季研究発表会 (2024.10.20, 熊本大学) にて行った口頭発表「長・短か？ 張り・緩みか？ — ドイツ語基本母音の非強勢位置での音節的振舞いに着目して」を論文化したものである。発表時、質疑・討論の場で寄せられた貴重なご意見に感謝する。あわせて、2 名の匿名審査員による適確で建設的な査読意見も、本稿の質的改善に大いに役立った。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献等

- Becker, Thomas (1998): *Das Vokalsystem der deutschen Standardsprache*. Frankfurt a.M.: Lang.
- Eisenberg, Peter (⁴2006): *Grundriss der deutschen Grammatik. Band 1: Das Wort*. Stuttgart and Weimar: Metzler.
- Grewendorf, Günther, Fritz Hamm, and Wolfgang Sternefeld (²1988): *Sprachliches Wissen. Eine Einführung in moderne Theorien der grammatischen Beschreibung*. Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Jacobs, Joachim (1990): Über Dualismen in der Grammatik. In: *Papiere zur Linguistik* 43(2), 75–99.
- König, Ekkehard, and Volker Gast (⁴2018): *Understanding English-German Contrasts*. Berlin: Schmidt.
- 国松孝二ほか [編] (1985): 『小学館 独和大辞典』 東京: 小学館.
- Maas, Utz (²2006): *Phonologie. Einführung in die funktionale Phonetik des Deutschen*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
- Mangold, Manfred (³1990): *Duden Aussprachewörterbuch. Der große Duden*, Bd. 6. Mannheim, Wien, and Zürich: Dudenverlag.
- Noak, Christiane (²2016): *Phonologie*. Heidelberg: Winter.
- Sievers, Eduard (1876): *Grundzüge der Lautphysiologie zur Einführung in das Studium der Lautlehre der indogermanischen Sprachen*. Leipzig: Breitkopf und Härtel.
- Spiekermann, Helmut (2002): Ein akustisches Korrelat des Silbenschnitts: Formen des Intensitätsverlaufes in Silbenschnitt- und Tonakzentsprachen. In: Auer, Peter, Peter Gilles, and Helmut Spiekermann [eds.], *Silbenschnitt und Tonakzent*, Tübingen: Niemeyer, pp. 181–199.
- Trubetzkoy, Nikolai S. (⁷1989 [1939]): *Grundzüge der Phonologie*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht. [英訳: *Principles of phonology*, translated by Christiane A.M. Baltaxe, 1969, Berkeley and Los Angeles: University of California Press; 邦訳: 『音韻論の原理』 長嶋善郎訳, 1980, 東京: 岩波書店]
- Vennemann, Theo (1991): Skizze der deutschen Wortprosodie. In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 10(1), pp. 86–111.
- Wiktionary, the free dictionary. <<https://en.wiktionary.org/>> (最終閲覧日: 2025.3.14)

執筆者連絡先: fujinawa@tufs.ac.jp

原稿受理: 2025 年 1 月 15 日